

① 排遣することを用ひされ。快く便ち話頭を擧起し、身心を抖擻して、猛に精采を著けよ。更に然らずんば、地に下り經行し、昏散の去るを覺えば、再び蒲團に上れ。忽爾として、擧せざるに自ら擧し、疑はざるに自ら疑ふ。行いて行くを知らず、坐して坐するを知らず、惟だ參情のみ有つて、孤孤迥迥、歴歴明明たり。是を斷煩惱處と名く、亦我喪處とも名く。然も是くの如くなりとも雖も、未だ究竟と爲さず、再び鞭策を加へて、箇の一何れの處に歸すと看せよ。這裡に到つて、話頭を提撕して、節次を無し了れり。惟だ疑情のみ有り、忘るれば即ち之れを擧せよ。直に返照の心盡くるに到る、是れを法忘すと名く。始めて無心の處に到るなり。是れ究竟なること莫しや麼や。古に云く、「謂ふこと莫れ、無心便ち是れ道といふことを」と。無心猶ほ隔つ一重の關、忽地に聲に遇ひ色に遇ひ、磕著撞著して、大笑一聲し、身を轉じ過ぎ來つて、便ち好し。懷州の牛、禾を喫すれば、益州の馬、腹脹ると道ふに。

古拙禪師示衆

諸大德何ぞ大精進を起して三寶前に對して深く重願を發せざる。若し生

- ① 排遣は、おしのけること譯す。
- ② 臨濟禪師曰く、是れ休廢か、說法聽法を解す、是れ備が目前歴歴底一箇の形段勿して孤明なる是れなり、這箇說法聽法を解す、若し是くの如く見得せば、便ち祖佛と別ならず云云。
- ③ 節次無しは、間斷無しの意なり、節は節格、次は次第の略。
- ④ 古云は傳燈二十九、同安常察禪師十支談心印の頌なり。
- ⑤ 忽地遇聲遇色は、擊竹見桃の類。
- ⑥ 杜順和尚法身の頌に云く、懷州の牛、禾を喫すれば益州の馬、腹脹る、天下醫人を覓むるに猪の左膊上に灸す。
- ⑦ 古拙禪師は、南嶽下二十四世なり、法を福林度禪師に嗣ぐ、傳は嚴統二十三に出づ。
- ⑧ 無門開禪師云く、參禪は須ら

死を明らめず、祖關透らすんば、誓つて山を下らず、長連床上、七尺單前に向つて、高く鉢囊を掛けて、壁立千仞、此の一生を盡して、徹し去らしむることを做すべし。若し此の心を辨せば、決して相賺かず。如其れ發心眞ならず、志猛厲ならず、這邊に冬を経、那邊に夏を過し、今日は進前し、明日は退後して、久久摸索し著すんば、便ち道ふ、般若靈驗無しと。卻つて外邊に向つて記すること一肚し、抄すること一部す、臭糟瓶の如くに相似ん。聞く者未だ惡心嘔吐することを免れず。直に做して彌勒の下生に到るとも、何の干涉か有らんや、苦なる哉。

太虛禪師示衆

如し未だ了悟せずんば、須らく蒲團上に向つて、冷坐すること、十年、二十年、三十年、箇の父母未生前の面目を看すべし。

楚石琦禪師示衆

兄弟口を開けば、便ち道ふ我れは是れ禪和と。他に如何なるか是れ禪と問ふに及びて、便ち東に覲西に覲、口扁擔の如くに相似たり。苦なる哉屈なる哉、佛祖の飯を喫著して、去つて本分の事を、理會せず、争ふて

- ① 祖師の關を透るべし、妙悟は心路を窮め絶せんことを要す、祖關透らす心路絶せずんば、盡く是れ依草附木の精靈なり。
- ② 象器箋に云く、僧堂床前の板を單と曰ふ、七尺單前と曰ふは、謂らく床後より前に至る六尺、更に單板一尺を加へ合して七尺と成すなり。
- ③ 摸索不着は、さぐりあてぬこと譯す。
- ④ 太虛圓禪師は、南嶽下三十世なり、默堂の照に嗣ぐ。
- ⑤ 冷は冷靜なり。
- ⑥ 楚石楚石禪師は、南嶽下二十世、海州天寧に住す、法を元叟の端禪師に嗣ぐ、傳は會元續略に出づ。
- ⑦ 扁は匾に作るべし、匾は、ひらたきなり、匾擔は荷ひ棒なり、「ひらたきありて申しわる」形、「しつべい口」と云ふも同じ。

文言俗句を持して、高聲大語して、略ぼ忌憚無し。全く羞を知らず、有般の底は蒲團上に去つて、父母未生以前本來の面目を究明せず、冷地裡に客春を學び、^① 指望して福を求め、業障を懺除す、道と太だ遠きこと有り。○心を凝し念を斂め、事を攝し空に歸して、念想纔かに生ずれば、即便ち過^② 捺す。此くの如きの見解は、即ち是れ空亡に落つる的外道、魂返らざる的の死人、又妄に能瞋能喜能見能聞を認め、明白を認得し了つて、便ち是れ一生參學の事畢るとするあり。我れ且く偏に問はん、無常到る時、燒いて一堆の灰と作る、這の能瞋能喜能見能聞的、什麼の處に去るや。恁麼に參する的是れ^③ 藥汞銀の禪なり、此の銀眞に非ず、一鍛に便ち流る。因に問ふ、爾尋常箇の什麼にか參す。答へて道ふ、「萬法一に歸す、一何れの處にか歸すといふに參せしむるあり。又我をして只だ此の如く會せしむ、今日方に知る不是なることを、和尚に就いて箇の語頭を請ふ」と。我れ道ふ、「古人の公案、什麼の不是か有らん、汝が眼本正し、師の故に因つて邪なり」と。累に請ふて已まず、向つて道ふ、去つて狗子無佛性の語に參じ、忽然として^④ 漆桶を打破せば、卻つて山僧が手裡に來つて棒を喫せよし。

① 理會は猶ほ識得と云ふがこと
② 冷地裡は「かたかけ、わきの方」と譯す。
③ 人天寶鑑五臺山無相禪師禮佛の示衆に曰く、汝が輩才かに泥佛を見れば便ち米を舂くが如くに相似て、曾て意謂無し。野客叢書に今の人傭工を指して客作と云ふ、「よそからやはれて來た米つき」なり。
④ 指望は、物を指し望むなり。
⑤ 捺は抑なり。
⑥ 道餘錄に云く、明眼の宗師に従ひ、勘辨し印證して始めて受用を得ん、誠に此の證有り、譬へば金の眞偽の如し、鍛師に非ざるときんば則ち別つ能はず、若し眞金ならば愈よ鍛へば愈よ明なり、若し藥汞銀ならば一鍛して即ち流出せん、本草綱目に水銀一名項、一名は汞とあり。

評して曰く。天如よりして下、皆元末及び國初の尊宿なり。傑峯、古拙、楚石の若きは、則ち身二代を経たる者なり。楚石は妙喜五世の孫たり。而して其の見地日光月明の如く、機辨雷の烈しく風の迅きが如し、^① 根原を直截して、枝葉を脱落す、眞に妙喜老人に愧づる無し。天如より以て今日に至るまで、^② 匹休の者無し。獨り其の語、向上極則の事を提持し、初學の人をして工夫を做さしむる處、絶だ少なり、僅かに一二を得て録すること左の如し。

高麗普濟禪師李相國に答ふるの書

既に曾て無字の語に於て提撕せば、必らずしも改め參せざれ。況んや別の語頭を擧起する時、曾て無字に參せば、必らず無字に於て、小熟の因地あり。切に移動すること莫れ、切に改め參すること莫れ、但だ二六時中、四威儀の内に於て、語頭を擧起して、幾時の悟不悟を待つこと莫れ、亦た有滋味無滋味を管すること莫れ、亦得力不得力を管すること莫れ。心思及ばず、意慮行はれざるに撈到して、即ち是れ諸佛諸祖身命を放つ處。

評して曰く。此の語録は、萬曆丁酉、福建の許元眞、東征して之れを朝鮮に得たるもの、中國未だ

① 漆桶は無明に譬へたるなり。
② 道餘錄に云く、直截根原は佛の印したまふ所、葉を摘み枝を尋ぬること我れ能はず。
③ 匹は配なり、君牙曰く、前人に追配す、朱註に云く、來り宅を相して周の匹休の地と爲す、言ふ洛をトして以て周命を無窮に配す。
④ 明の洪武三十年、高麗を改めて朝鮮と號す。
⑤ 心賦に曰く、心行所滅、當に放身捨命の時なるべし、又汾陽の語。
⑥ 萬曆二十五年、丁酉は即ち晋邦慶長二年に當る。

有らざるなり。因つて其の要を録して之れを識す。

楚山琦禪師解制示衆

諸大徳、九十日の中、還つて曾て證悟するや也無しや。若し其れ未だ悟らすんば、則ち此の一冬、又是れ虚しく喪し了れり。若し是れ本色の道流ならば、十方法界を以て箇の圓覺の期と爲し、長期短期百日千日、結制解制を論ずる莫く、但だ話頭を擧起するを以て始めと爲し、若し一年悟らすんば、參すること一年し、十年悟らすんば、參すること十年し、二十年悟らすんば、參すること二十年し、平生を盡して悟らすんば、決定して此の志を移さざれ。直に須らく箇の眞實究竟の處を見んと要すべし。方には是れ放參の日なり。〇如し未だ言前に旨に契ふこと能はずんば、但だ一句の阿彌陀佛を將て、之れを懷抱に置き、默默として體究し、常時に疑情を鞭起せよ。この佛を念ずる是れ誰ぞと、念念相續、心心無間ならば、人の路を行いて、水究まり山盡るの處に到つて、自然に箇の轉身的の道理有るが如し。因地一聲して心體に契入せん。

評して曰く、話頭を擧起するを ① 進期と爲し、眞實究竟を出期と爲す。當に牢く記取すべし。

天真毒峰善禪師示衆

果して生死を了脱せんと欲せば、先づ須らく大信心を發し、弘誓願を立つべし。若し所參の公案を打破し、父母未生前の面目を洞見し、微細の現行生死を坐斷せずんば、誓つて本參の語頭を放捨し、眞の善知識を遠離し、名利を貪逐せず。若し故に此の願に違はば、當に惡道に墮すべし。此の大願を發し其の心を防護せば、方に公案を領受するに堪へたり。或は無字を看せば、要緊甚に因つてか狗子無佛性の上に在つて力を著けよ。或は萬法歸一を看せば、要緊一何れの處に歸すと云ふに在り。或は念佛を參究せば、要緊佛を念ずる是れ誰ぞと云ふに在り。回向返照して深く疑情に入れ、若し話頭力を得ずんば、還つて前文を提して、以て末句に至り、首尾をして一貫ならしめば、方に頭緒ありて疑ひを致すべきなり。疑情斷えず、切切として用心せば、覺えず歩を擧げて身を翻し、箇の懸空の筋斗を打せん。卻つて再來して棒を喫せよ。

空谷隆禪師示衆

呆蠢蠢地に箇の話頭を念すべからず、亦推詳計較すべからず。但だ時中憤然として此の事を明らめんと要せよ。忽爾として懸崖に手を撒し、箇の翻身を打して、方に孤明歷歷を見ん。此に到つて耽

① 楚山紹琦禪師は、南嶽下二十八世なり、法を東林無際悟禪師に嗣ぐ、傳は會元續略に出づ。
② 十方は、上下四方四維なり、法界は一切衆生身心の本體なり。
③ 圓覺經に云く、圓覺を以て我が伽藍と爲し、身心平等性智に安居す、同註に百二十日を長期と爲し、九十日を短期と爲す。
④ 遷は入るの義なり、入寺を進寺、進院と云ふ。
⑤ 天真毒峰禪師は、南嶽下二十七世なり、法を月溪澄禪師に嗣ぐ、傳は會元續略に出づ。

⑥ 懸は物の宙に在るを云ふ、筋斗は當に斤斗に作るべし、斤は木を斫る具なり、頭重うして柯輕し、之れを用ふれば則ち頭轉ず、懸空筋斗とは「體なしのとんぼがへり」と云ふことにて、疑團の碎けたる様子なり。
⑦ 空谷隆禪師は、南嶽下二十五世なり、法を白蓮徹雲智安禪師に嗣ぐ、傳は會元續略に出づ。

著すべからず。還た腦後の一槌ありて、極めて是れ透り難し。備且く慙麼に參じ去れ。○參せずして自ら悟る、上古或は之れあり、自餘は未だ力參に従らずして悟を得る者あらず。○優曇和尚、念佛的は是れ誰ぞと提せしむ。汝今必らずしも此れ等の法を用ひざれ、唯だ平等に念じ去れ。但だ念じて忘れずんば、忽然として境に觸れ縁に遇ふて、轉身の一句を打著し、始めて知らん、寂光淨土、此の處を離れず、阿彌陀佛自心を越えざることを。

評して曰く。但だ時中憤然として、此の事を明めんことを要せよと。此の句甚だ妙なり、話頭を看するの法を該攝して曲さに盡せり。

⑦ 天奇和尚示衆

汝等今より決定心を發し、晝參夜參、本參を擧定して、他は是れ箇の甚麼の道理ぞと看せよ。務めて箇の分曉を討ねんことを要す。日久しく歳深うして、昏沈を煉へざれども昏沈自ら退き、散亂を除かざれど、散亂自ら絶し、純一無雜、心念不生ならば、忽然會得して、夢みて醒めたるが如く、從前を覆し看るに、俱に是れ虚幻、當體、本來現成、萬象森羅、全機獨露、這の大明國裡に於て、也た人たることを枉げず、此の法門に向つて僧たることを枉げず、卻來して縁に隨つて日を度る。豈に暢ならずや、豈に快ならずや。○終日佛を念じて全く是れ佛念なることを知らず、如し知らずんば須らく箇の念佛的は

- ① 普賢觀經に云く、釋迦牟尼盧遮那、遍一切處と名く、其の佛の住處、常寂光と名く。
- ② 天奇和尚は、南嶽下三十世なり、法を寶峰明瑄禪師に嗣ぐ、傳は會元續略四、嚴統二十三に出づ。
- ③ 煉は昏沈の「かなくさ」を扣き退けるなり。
- ④ 枉は「むだ」と譯す。

れ誰ぞと看すべし。眼就ち看定し、心就ち擧定して、務めて箇の下落を討ねんことを要す。評して曰く、毒峯、天奇、皆念佛を參究せしむ。空谷何の故に此等の法を用ふることを必とせざれと謂ふ。蓋し是れ機に隨つて同じからず、便に任せて礙り無し。

⑧ 古音琴禪師示衆

坐中見る所の善惡は、皆坐する時觀察を起さず、正思惟せずして、瞑目靜坐し、心精采ならず、意境に順つて流れ、半夢半醒、或は靜境に貪著して樂と爲し、種種の境界を見ることを致すに由る。夫れ正因に工夫を做す者は、睡に當つては、便ち睡り一覺せよ、一たび醒めて便ち起き、精神を抖擻し、眼目を擲抄し、牙根を咬住し、拳頭を捏緊して、直に話頭何れの處に落在すと看せよ。切に昏に隨ひ沈に隨ふこと莫れ、絲毫の外境も采着すべからず。○行住坐臥の中、一句の彌陀を斷すること莫れ。須らく信すべし、因深く果深くして、直に念せざるに自ら念せしむることを。若し能く念念空しからざれば、念一片を成ずることを管取せん。當念に念する人を認得せば、彌陀と我れと同じく現せん。

- ① 古音琴禪師は、南嶽下三十世なり、法を壽堂松禪師に嗣ぐ、傳は會元續略に出づ。
- ② 擲抄は「すりこする」と譯す。
- ③ 采着は「かまはめ」と譯す。
- ④ 異巖登禪師は、寂菴潛禪師の法嗣なり。

⑨ 異巖登禪師釋疑集

問ふ、「學人知識に參求して、或は箇の話頭を提せしめ、或は箇の話頭を疑はしむ、同か別か。」答

ふ、纒かに話頭を擧すれば當下に便ち疑ふ、豈に二理有らんや、一念提起すれば疑情即ち現す、覆し去り翻し來つて、精研推究せば、功深く力極つて、自ら了悟を得ん。

評して曰く。釋疑集の中、此の一段の文最も精當と爲す。今人頗る此の二端に滯つて決せざる者あり、蓋し未だ曾て實に工夫を做さざるが故なり。

① 月心和尙示衆

新鮮の志氣を憤起し、箇の話頭を擧して、結末字上に於て、疑情永長、

沈沈痛切なることを要す。或は口を杜ちて默參し、或は聲を出して追審せよ、重物を失するが如く、務めて親しく逢ひ親しく得んことを要す、日用の中、一切時一切處、更に二念すること無かれ。

① 月心總實禪師は、南嶽下三十二世なり、法を龍泉聰禪師に嗣ぐ、傳は嚴統及び會元續略に出づ。

國譯禪關策進卷の二終

國譯禪關策進卷の三

諸祖苦功節畧第二

獨坐靜室

① 道安大師、靜室に獨坐すること十有二年、精を殫し思を構へて、乃ち神悟を得たり。評して曰く、此の老精思を竭し、乃ち神悟を得たり。是れ一味に靜座して便ち了するにあらず。

懸崖の樹に坐す

② 靜琳禪師、講を棄て禪を習ふ、昏睡心を惑はす。懸崖の下より望めば、千仞の旁一樹を出す有り、草を以て之れに藉き、其の上に趺坐して、一心繫念し、動もすれば、背日を経。死を怖るゝ既に重ふして、專精不二なり。後遂に超悟す。

草食木栖

③ 通達禪師、太白山に入り、糧粒を齎まず、餓るれば則ち草を食ひ、息めば則ち樹に依る。端坐し

① 道安大師は、佛圖澄を師とす、編年通論に云く、佛教の盛なる佛圖澄に由つて安を得、安に由つて遠公を得たり、是の三大士は化儀全像なりと。
② 續高僧傳習禪の篇に出づ。
③ 傳は續高僧傳神僧傳に出づ。

て玄を思ふこと五年息まず、因に木を以て塊を打つ、塊破れて、廓然として大悟す。
評して曰く、饒ひ汝草食樹栖すとも、若し玄を思はずんば、漫爾として多載、深山の野人に異なるもの、幾んど希なり。

衣帯を解かず

金光の照禪師、十三にして出家、十九にして洪陽山に入つて、迦葉和尚に依り、服勤すること三載、衣、帯を解かず、寢、席に沾けず、又姑射山に在つても亦是くの如し。豁然として啓悟す。

錐を引いて自ら刺す

慈明、谷泉、瑯琊の三人、伴を結んで汾陽に參す。時に河東苦寒なり、衆人之れを憚る。慈明志道に在り、曉夕怠らず、夜坐睡らんと欲すれば、錐を引いて自ら刺す。後汾陽に嗣ぎ、道風大いに振ふ。西河の獅子と號す。

暗室にも忽にせず

宏智禪師、初め丹霞の淳に侍す。因つて僧と公案を徴詰す、覺えず大笑す、淳責めて曰く、「汝笑ふ、這の一聲多少の好事を失了す、道ふことを

- ① 石霜楚圓慈明禪師は南嶽十一世なり、法を汾陽善昭禪師に嗣ぐ、傳は會元に出づ。
- ② 南嶽芭蕉菴大道谷泉禪師。
- ③ 瑯琊山慧覺禪師。
- ④ 會元十一に云く、汾陽の昭禪師上堂に曰く、汾陽門下西河の師子有り、門に當つて睡坐す云云。
- ⑤ 宏智禪師は、青源下十四世なり、法を丹霞禪師に嗣ぐ、傳は善覺錄に出づ。
- ⑥ 服は猶ほ著のごとし、膺は胸に奉持して之れを心胸の間に著け、能く守るを言ふなり。
- ⑦ 史記に曰く、司馬李王捧腹大笑す。

見すや、暫時も在らざれば、死人に如同す」と。智再拜して服膺す。後

闇室に在りと雖も、未だ曾て敢て忽にせず。

評して曰く、道を論じて笑ふ、古人尙ほ呵す。今世諦の談諧、腹を捧

げて厭くこと無し。丹霞之れを見ば、又當に如何んがすべき。

晩に必ず涕泣す

伊庵の權禪師、功を用ふること甚だ鋭し、晩に至つて必ず涙を流して曰く、「今日又只だ恁麼に空しく過せり、未だ知らず、來日の工夫如何ん」と。師、衆に在つて人と一言を交へず。

三年力行

晦堂心禪師、自ら言ふ、「初め道に入りしとき、自ら甚だ易きを持めり、黃龍先師に見ゆるに達んで、日用を退思するに、理と矛盾すること極めて多し、遂に之れを力行すること三年、祁寒溽暑にも、志を確うして移さず、方に事事理の如きを得たり、而して今、欸睡掉臂も也た是れ祖師西來意」と。

圓枕睡を警す

詰侍者、睡るときは、圓木を以て枕と爲し、少しく睡れば則ち枕轉す、覺めて而して復た起つ。率

ね以て常と爲す。或は謂ふ、「心を用ふることも太だ過ぎたり」と。答へて云く、「我れ般若に於て緣分素より薄し、若し此くの如くせずんば、恐くは妄習の爲めに牽かれん」と。

雨を被つて覺えず

分庵主、道の爲にすること猛烈にして食息の暇無し。一日欄に倚つて狗子の話を看す、雨來るも覺えず、衣濕ふて方めて知る。

誓つて被を展べす

佛燈の珣禪師、佛鑑に依り、衆に隨つて咨請す、逸として所入無し。

歎じて曰く、「此の生、若し徹證せずんば、誓つて被を展べす」と。是に於て四十九日、只だ露柱に寄り地に立ち、考妣を喪するが如くして、乃ち大悟を得たり。

書を擲つて顧みす

鐵面の昺禪師、行脚の時、郷を離るゝこと未だ久しからずして、受業

の一夕遺火して、悉く燬燼と爲ると聞き、書を得て之れを地に擲つて曰く、「徒に人意を亂す耳」と。堅く省發を誓ふ

靈源清禪師、初め黃龍の心に參じ、衆に隨つて問答す、茫然として端倪を知らず、夜佛前に誓

つて曰く、「當に形壽を盡して法を以て檀と爲るべし、願くば早く開解せしめ給へ」と。後玄沙の語を

時の異縁無し

圓悟の勤禪師、再び東山の演に參じて侍者と爲る、窮め參じ力め究む。自ら云ふ、「山僧衆に在つて一時の異縁無し、十年にして方に打徹することを得たり」と。

評して云く、十年の間、一時の異縁無しと、試みに問ふ、今一日の間、

異縁多少ぞ、何れの時か打徹し去ることを得ん。

造次も忘れず

牧庵の忠禪師初め台教を習ふ、後禪宗に志し龍門の眼に謁す。造次

の頃も提撕を忘れず、適ま水磨に縦歩して、額に法輪常に轉すと云ふを

河津に抵るを忘る

慶壽の享禪師、鄭州普照の寶公に參す。朝夕精勤、一日事を以て睢陽

分庵主、法を懶菴禪師に嗣ぐ。

佛燈守珣禪師は、南嶽下十六世なり、法を佛鑑に嗣ぐ、傳は會元十九に出づ。

智圓禪師は南嶽下十六世なり、法を慧勤佛鑑禪師に嗣ぐ、傳は會元十九に出づ。

燬は盆中の火なり、燼は火の餘末なり。

黃龍靈源清禪師は、南嶽下十四世、法を黃龍祖心禪師に嗣ぐ、傳は會元十七に出づ。

類書要に端倪は猶ほ端緒のごとしとあり、「はしくれ」を見て取りて全體を知るの意。

圓悟克勤禪師は、南嶽下十五世にして、法を五祖演禪師に嗣ぐ、傳は會元十九に出づ。

黃龍の牧庵忠禪師は、南嶽下十六世にして、法を龍門清遠佛眼禪師に嗣ぐ、傳は會元十二に出づ。

水磨は確なり。

慶壽教享禪師は、法を普照寶禪師に嗣ぐ、傳は會元續略に出づ。

に往いて趙渡を過ぐ。疑情散せず、其の津に抵るを忘る。同行之れを覺して曰く、「此れ河津なり」と。豁然として悲喜交も集まる、以て寶公に白す。公曰く、「此の僵臥の漢、未在」と。教に因つて、日面佛の語を看す、一日雲堂に靜坐す、板聲を聞いて大悟す。

寢食兩忘

●松源の嶽禪師、初め居士を以て應庵の華に參す。契はず、愈よ自ら奮勵して、密庵の傑に見ゆ。隨つて問へば隨つて答ふ。密歎じて曰く、「^①黃楊木の禪のみ」と。奮勵彌よ切なり、寢食を忘るゝに至る、會ま密の入室に會て僧に問ふ、「不是心、不是佛、不是物」と。師傍より大悟す。

口體俱に忘る

高峰の妙禪師、衆に在つて、脇席に沾けず、口體俱に忘る。或時廁に如く、^②中單にして出づ。或時は^③函を發いて扇さずして出づ。後徑山に歸堂して大悟す。

諸緣盡く廢す

傑峯の愚禪師、初め古厓、石門に參す。法語を佩受して、晝夜兀坐、契はず、後止巖に參す。不是心、不是佛、不是物を擧す。愈よ疑つて乃ち諸緣を盡く廢し、寢食俱に覺知せず、氣絶ゆる者の如し。

一夕坐して^④夜分に至り、隣僧の證道歌を詠じて、「妄想を除かず、眞をも求めず」と云ふを聞いて、豁然として重負を釋くが如し。^⑤夜半忽然として^⑥月指を忘れ、虚空日輪を迷出して紅なり。この句あり。

門を杜ちて力參す

●移刺楚材丞相、^⑦萬松老人に參じ、家務を屏斥し、人跡を杜絶して、^⑧寒暑と雖も、日として參せずといふこと無し。膏を焚きて晷に繼ぎ、寢を廢し食を忘るゝこと幾んど三年にして、乃ち印證を獲たり。

評して曰く。是くの如く心に用ひ、是くの如く道を證す、是れ之れを在家の菩薩と謂ふ。也た肉を喫得して已に飽き、僧を尋ね來りて禪を説かしむ、獨り何をか爲んや。

頭を以て柱に觸る

中峯の本禪師、高峯死關に侍して、晝夜精勤す。困すれば則ち頭を以て柱に觸る。一日金剛經を誦す、荷擔如來の處に至つて、^⑨恍然として開解す。自ら謂ふ、「所證未だ極ならず」と。彌よ益す勤苦し、咨決意り無し。流水を觀るに及んで乃ち大悟す。評して曰く。自ら謂ふ、證する所未だ極ならずと、故に終に極處に至る。

①馬祖錄に云く、既にして疾を示す、院主問ふ、和尙近日尊候如何ん、師曰く、日面佛月面佛。

②靈隱松源崇嶽禪師は、法を天童密庵傑禪師に嗣ぐ、傳は會元續略に出づ。

③黃楊木は「つげ」なり、字彙に木堅緻にして長じ難し、大惠普說に云く、道の漢黃楊木の禪に參す。

④衣も着ず、「はたきばかりにて」衆中へ出るを云ふ。

⑤函は禪堂の單の後に在る覆子を入れる處なり。

⑦夜分は中夜なり、今明日の分の時と云ふ意なり。

⑧會元續略の二に偶有り、曰く、時時觀面相違はず、屢生の氣力を喫盡して窮す云云。

⑨圓覺經に曰く、修多羅の教は月を標する指の如し、若し復、月を見れば標する所、畢竟月に非ざること了知せん。

⑩移刺眞卿居士は楚材、湛然と號す、法を報恩行秀禪師に嗣ぐ、傳は會元續略の一に出づ、青源下二十四世なり。

⑪萬松老人は報恩行秀禪師なり。

⑫獨摩疏に云く、菩薩に二有り、出家、在家と謂ふなり。字彙に恍は懐と同じ、總て分明ならざるなり。

今は途路を以て家に到るとする者衆し、嗟いかな。

關中刻苦

毒峯の善禪師、清溪に在つて進關す。臥榻を設けず、惟だ一凳を置く、悟を以て則と爲す。一夕昏睡して夜半を覺えず、乃ち凳を去つて晝夜行立す。又壁に倚り睡り去る、誓つて壁に傍はず、遂に工夫日に進むを得、鐘聲を聞いて忽ち自由なり。偈に云く、「沈沈寂寂として施爲を絶す、觸著すれば端無く吼えて雷に似たり、動地の一聲消息盡き、觸體粉碎して夢初めて回る。」

脇席に至らず

壁峯の金禪師、晋雲の海に參す。示すに萬法の公案を以てす、之れを疑ふこと三年、偶々蔬を摘む次、忽ち凝然たること之れを久しうす。海問ふ、「子定するか。」對へて曰く、「定動關らず。」海問ふ、「定動關らざる是れ甚麼んぞ。」金、筐を以て之れに示す。海肯んせず。金、筐を地に撲つ。亦肯はず。爾後工夫益す切なり、脇席に至らず。一坐七日、一日伐木の聲を聞いて大悟す。

獨り鈍工を守る

西蜀の無際禪師、初め工夫を做す、四指の大きい書の書帖も亦看す、只だ是れ拍盲鈍工夫を做す、乃ち大徹大悟を得たり。

評して曰く。此の意極めて是なり、但だ教理を明めざる者、未だ宜しく嘖に效ふべからずと。

人の肩を拍つて行くなり、今は「向ふ見ず」と譯す。
②人自ら量らず強ひて人を擧ぶ之れを嘖に效ふと云ふ。

國譯禪關策進卷の三終

國譯禪關策進卷の四

後集(二門)

諸經引證節略

① 般若經(薩陀婆品)

空中に聲あつて、常啼菩薩に告げて言く、「汝、東行して般若を求めんに、疲倦を辭すること莫れ、睡眠を念ふこと莫れ、飲食を思ふこと莫れ、晝夜を想ふこと莫れ、寒熱を怖ること莫れ、内外の法に於て、心を散亂すること莫れ、行く時左右に顧視するを得ざれ、前後上下四維等を觀ること勿れ、しし。」

華嚴經(第十三菩薩)

勤首菩薩の偈に云く、「燈を鑽つて火を取るが如し、未だ出でずして數數息まば、火勢隨つて止滅す、懈怠の者も亦然り。」と釋して曰く、「當に智

① 般若は茲に智慧と云ふ。

本經の上文は須菩提、佛と般若を求むるの問答なり。

② 智度論に云く、薩陀婆品、兼に常啼と譯す、是の菩薩、佛を求むるの故に、憂愁啼哭すること七日七夜、故に常啼と號す。

③ 燈は木なり、古は木を鑽つて火を取る。

慧の鑽を以て、一境に注ぎ、方便の繩を以て、善巧に回轉すべし、心智住すること無く、四儀間無きときは、則ち聖道生ずべし。譬爾として心を起し、暫時も照を亡せば、皆息むと名くるなり。と。

大集月藏經(大方等大集月藏)

若し能く、精勤繫念して散せざれば、則ち煩惱を休息し、久しからずして、無上菩提を成することを得ん。

十六觀經(義疏中)

佛、章提希に告ぐ、應當に心を專にして念を一處に繫くべし。

出曜經(二十卷)

智者、慧を以て心を鍊り、諸垢を尋究するは、猶ほ鑛鐵の、數々入れて百たび鍊れば、則ち精金を成すが如し、猶ほ大海の、日夜沸動すれば、則ち大寶を成すが如し。人も亦是くの如し。晝夜心を役して止まざれば、便ち果證を獲ん。

評して曰く、今人但だ心を息めて禪那に入るを知りて、寧ろ心を役して果證を獲ることを知らん。や

大灌頂經

國譯禪關策進 卷の四

④ 十六通りの觀想を説く故に名く。

⑤ 觀經の註に云く、章提希は頻婆娑羅沙王の夫人なり、此に思惟と云ふ。

⑥ 經の序に云く、此の經佛説に非ず、婆須蜜の舅、法教菩薩の宣する所なりと。

⑦ 圓覺に曰く、譬へば鏡を磨するが如し、垢盡くれば明現する當に知るべし、身心皆幻垢なることを、と。

禪思の比丘、他の想念なし、惟だ一法を守つて、然る後心を見る。

遺教經

夫れ心は、之れを一處に制すれば、事として辨せずと云ふこと無し。評して曰く。一法を守り、一處に制す、幸に此等語言の在るあり。

楞嚴經(九ノ上二十六)

又此の心を以すれば、内外精研なり。○又此の心を以すれば、研究精極す。

彌陀經(疏抄三の二十七)

名號を執持して、一心亂れず。

評して曰く。只だ此の一心不亂の四字、參禪の事畢んぬ、人多く此に於て之れを忽にす。

楞伽經

若し能取所取、分別の境界、皆是心の所現のものたるを了知せんと欲せば、當に憤鬧、昏滯、睡眠を離れて、初中後夜、勤めて修習を加ふべし。

金剛般若經

薩陀波崙菩薩、七歳のあひだ經行住立して、坐せず臥せず。

寶積經(大寶積經)

佛、舍利弗に告ぐ、彼の二菩薩、精進を行する時、千歳の中に於て、未だ曾て一彈指の頃だも睡眠に逼惱せられず。千歳の中に於て、未だ曾て念を起して、飲食の鹹淡美惡を稱量せず。千歳の中に於て、乞食する時毎に、未だ曾て食を授くる人の、男たり女たることを觀す。千歳の中に於て、樹下に居止して、未だ曾て面を仰いで樹相を觀す。千歳の中に於て、未だ曾て親里の眷屬を緣念せず。千歳の中に於て、未だ曾て念を起し、我れ頭を剃らんと欲せず。千歳の中に於て、未だ曾て世間無益の語を論說せず。

評して曰く。此れは是れ大菩薩の境界、凡夫の及ぶ所に非ずと雖も、然も知らざる可からず。

大集經(大方等大集經)

法悟比丘、二萬年の中、常に念佛を修して、睡眠あること無し、貪瞋等を生ぜず、親屬、衣食、資身の具を念せず。

念佛三昧經(六卷一)

舍利弗、二十年の中、常に勤めて毘婆舍那を修習して、行住坐臥、正念觀察して、曾て動亂す

釋氏要覽の上に曰く、梵語に比丘と云ひ、秦に乞士と言ふ。

謂く、上諸佛に於て法を乞ひ、慧命を資養す、施主に於て食を乞ひ、色食を資養す。

首楞は一切事究竟と名く、嚴は堅に名く、一切究竟堅固なり。

執は聞いて新に之れを受く、持は受けて斯に之れを守る。

翻譯名義集の四に云く、楞伽、正には薩野迦と言ふ、佛、南海の濱に住し、楞伽國摩羅耶山に入りて此の經を説き給ふ、梵語楞伽、此に不可住と云ふ、唯だ神通の人、方に能く到るなり。

翻譯名義集に曰く、舍利弗此に驚子と言ふ、其の母身形端正にして眼淨く驚鷲の如し、母に連れて名を得たり、此れを驚鷲の子と云ふなり。

二菩薩は淨明、寶積を指す。

僧祇に曰く、乞食分つて僧尼に施す、衛護して道業を修せしむ、故に分衛と云ふ。

翻譯名義集止觀篇に曰く、毘婆舍那を觀涅槃、又は了見と名く。

ること無し。

自在王菩薩經(二卷一)

金剛齊比丘、正法を修習す。諸の魔、身を隠して之れを伺ふ。千歳之れを伺へども、一念心の散じて惱亂を得べきを見ず。

如來智印經(一卷一)

輪王、慧起、國を捨て、家を出で、三千歳繫念して、亦倚臥せず。

中阿含經(六十卷)

尊者阿那律陀、尊者難提、尊者金毘羅、共に林中に住し、後先乞食し歸つて、坐禪して晡時に至る。先づ坐より起つ者、或は瓶水を汲んで、能く獨り擧ぐるに勝ゆ。如し勝ゆる能はざれば、便ち手を以て一比丘を招いで、兩人共に擧げ、各相語らず、五日に一集し、或は兩に説法し、或は聖默然す。

評して曰く。此れ萬世、伴を結んで修行するの良法なり。

雜譬喻經

波羅奈國に一人あり、出家して自ら誓ふ。「應眞を得ざれば終に臥息せず」と。晝夜經行、三年に

① 金剛齊比丘は、自在王の前身なり。

② 十號の一なり。

③ 沙法師云く、阿含此に傳ふと云ふ、所説の義、是れ則ち大小二教に通ず。

④ 瓶高く徳重く、人に擧げらるる爲めに尊者と名く。

⑤ 阿那律、此に如意、又は無貧と云ふ。

⑥ 難提、法華に那提迦葉と作す。

⑦ 金毘羅、鬼神王の名、金光明千手經に出づ。

⑧ 波羅奈は中天竺鹿野なり。

して道を得たり。又羅閱祇國に一の沙門あり、草を布いて褥と爲して其の上に坐し、自ら誓つて云く、「道を得ざれば遂に起たず」と。但だ睡眠せんと欲すれば錐を以て髀を刺す、一年の中に應眞の道を得たり。

雜阿含經(五十卷聲聞の)

是くの如く比丘、精勤方便して、肌膚瘦損し、筋連り骨立てども、善法を捨てず、乃至未だ得べき所の者を得ざれば、精進を捨てず。常に其の心を攝して、放逸に住せず。

評して曰く。應に得べき所、須らく知るべし。應に得べきとは何事ぞ。

此の經に據れば、則ち應に諸漏を盡し、三明六通を證し、聲聞果を成ずるを得べし。今の期する所の如きは、則ち應に心宗を圓悟し、一切種智を證し、無上の佛果を成ずるを得べし。

阿含經(増一阿含)

乃至三明を成就し、暗冥を滅除し、大智明を得ることは、皆、精勤修習して、静を樂んで獨居し、專念不休の致す所に由る。

評して曰く。專念して休せざること、之れを久しうするときは、則ち一心亂れず。

① 三明は、一に天眼智明、二に宿命智明、三に漏盡智明。

② 六通は、一に神通、二に天眼通、三に他心通、四に宿命智通、五に天眼通、六に漏盡通。

③ 大般若經に云く、煩惱生ぜざるを一切種智と名く、因を般若と云ひ、果を一切種智と云ふ。

④ 始末を擧げて中間を略する辭。

法集要領經(四卷三十三品悉皆頌)(一本頌を頌)

若し人、百歳の中に、懈怠して劣に精進せんよりは、如かず一日の中、勇猛に精進を行はんには、評して曰く。此の義を知れば、則ち張善和の輩、終りに臨んで、十念して往生すること、了然として疑ひ無かる可し。

無量壽經

至心に精進し、道を求めて止まざれば、會らず當に尅果すべし、何の願か遂げざらん。

一向出生菩薩經

阿彌陀佛、昔し太子たりしとき、此の微妙の法門を聞いて、奉持精進す、七千歳の中、脇席に至らず、意、傾動せざりき。

寶積正法經

大乘を樂求し、其の心勇猛にして、身命を捨つといへども、顧惜するところ無く、菩薩行を修し、勤めて精進を加へて、少しも懈怠すること無し。

六度集經

往生集に曰く、張善、和牛を屠るを業と爲す、終りに臨んで群牛の命を索むるを見る、是に於て大に怖れ、其の妻を喚んで云く、速に僧を延いて我が爲めに念佛せよ云云、自ら言ふ、佛來り、我れを迎ふと、即ち化し去る。

梵語に阿彌陀と云ふ。

法華に云く、設ひ衆來り加ふるも、其の心傾動せず。

法界次第に波羅密に三翻有り、事究竟と、到彼岸と、度無極となり、三藏法數に云く、事理行滿生死の流れを度り、涅槃の岸に登る、窮極有ること無し。

精進、度、極まり無き者は、精、道奥に存す。之れに進んで怠ること無く、臥坐住歩、喘息にも替てず、○心心相續して、自ら放逸せず。

修行道地經(八卷四)

佛言く、自ら宿命を見るに、無量劫より往返生死し、其の骨、須彌山に過ぎ、其の髓、地に塗らば、大千世界に遍すべく、其の血、古今天下の普雨よりも多し。但だ斯の生死の患を免れんと欲せば、晝夜精進して、無爲を求めよ。

評して曰く。曰く道を求む、曰く此の微妙の法門を聞く、曰く大乘を樂求す、曰く精存道奥、曰く無爲を求むと。是くの如きの精進を正精進と名く。然らずんば、縦ひ形を勞し志を苦め、歳を累ね、劫を経るも、或は外道に淪み、或は偏乘に墮して、終に益無きなり。

菩薩本行經(二十七)

直に成佛に至るは、皆精進に由る。

彌勒所問經(一)

佛、阿難に語るらく、彌勒の發意、我れの前に先だつこと、四十二劫、我れ其の後に於て、乃ち道意を發し、大精進を以て、九劫を超越し、無上正眞の道を得たり。と。

評して曰く。釋迦、後進を以て、而して頓に四十二劫の先輩に踰ゆ。勤惰之れを爲すなり。經に言く、名利に貪著し、多く族姓家に遊ぶ。彌勤の先に學んで、而して後に成する所以の者は、此れに坐る。則ち釋迦の名利を棄て、山林に入つて、國王大臣に親近せざることを知るべし。之れを識せよや。

文殊般若經(一の二)

一行三昧の者は、應に空間に處して、諸の亂意を捨て、心を實理に繋けて、一佛を想念すべし。念念相續して、懈怠せざれば、一念の中に於て、即ち能く十方の諸佛を見て、大辯才を獲ん。

般舟三昧經(三卷)

九十日の中、不坐不臥、假使ひ筋斷ち骨枯るゝも、三昧成らずんば、終に休息せざれ。

評して曰く。以上の二條は、俱に念佛を指して、而して諸の法門を兼ね、淨業を修する者は、知らざる可からず。

四十二章經

夫れ道を爲むる者は、譬へば一人萬人と戦ひ、鎧を掛け門を出づるに、意或は怯弱するもの、或は半路にして退くもの、或は格闘して死するもの、或は勝を得て還るもの、如し。沙門の學道も、應に其の心を堅持し、精進勇銳、前境を畏れず、衆魔を破滅して、道果を得べし。

評して曰く。半路にして退く者は、自ら畫して進まざる者なり。格闘して死する者は、稍や進んで功無き者なり。勝を得て還る者は、惑を破つて道を成する者なり。勝を得るの由は、全く其の心を堅持して、精進勇銳なるに在り。學人但だ當に志を一にして、直に前むべし、退くを慮る毋れ、死を畏るゝ毋れ。前に云はずや、吾れ此人を保す、必らず道を得んと。法華に云く、「吾れ今汝が爲に、此の事を保任す、終に虚しからず。」と。佛既に爾く保す、何んぞ慮り、何んぞ畏れん。

觀藥王藥上二菩薩經(二十一卷)
常に大乘を念じて、心に忘失せず、勤修精進して、頭燃を救ふが如し。評して曰く。當に勤めて精進して、頭燃を救ふが如くすべし。今叢林、早暮持誦す。然れども其の文を誦して、其の義を思はず、其の義を明かにすとも、其の事を履ますんば、亦何の益かあらん。

寶雲經(七卷)

心を以て心を繋ぐ、心を以て心に住す。心專一の故に、次第に間無し。定心を得るが故に、心常に寂靜なり。

⑥法界一相生佛平等、又、眞如三昧と名く。
⑦般舟此に常行道と名く。

⑧論語雍也篇の朱註に云く、力足らざる者は、進まん欲して能はざるなり、畫する者は能く進んで欲せざるなり、之れを畫と謂ふ者は、地を畫し以て自ら限るが如きなり。
⑨法華譬喻品に云く、汝、速かに三界を出で、當に三乘聲聞辟支佛を得べし、吾今汝が爲に此の事を保任す、終に虚しからざるなり云云。

⑩經に曰く、過去に佛有り、瑠璃光照と號す、滅度の後時に比丘有り、日藏と名く、正法を宣布す、時に長者有り、星宿光と名く、説法を聞く故に何利勒及び諸の雜藥を持して日藏并に諸大衆に奉す、此に因つて立てて藥王と名く云、星宿光の弟を雷光明と名く、説法を聞く故に其の醜陋上妙の藥を以て用て供養す。

正法念處經

精勤修行すれば、則ち諦を見ることを得、是の故に應に、曠野に寂靜にして、一心正念に、一切の多語言説、一切の親舊、知識の來去相見を離るべし。

阿毘曇集異門足論(二十卷三)

假使ひ我が身、血肉枯竭し、唯だ皮筋骨のみ連挂して存するも、若し本と求むる所の勝法未だ獲されば、終に止息せず。精進の爲の故に、應に深く寒熱、饑渴、蛇蝎、蚊蠅、風雨等の觸を忍受すべし。又應に他人の發する所の能く、身中の猛利辛楚を生ずる奪命、苦受、毀辱の語言を忍受すべし。

評して曰く。本求むる所の勝法未だ獲されば、終に止息せずと、即ち宗門に所謂本參の話頭破らざれば、誓つて休歇せざるの意なり。

瑜伽師地論(三十一卷)

六度の初めの三は、是れ戒學の攝、靜慮は是れ心學の攝、般若は是れ慧學の攝、唯だ精進のみ一切に通じ。

大乘莊嚴經論(十三卷)

至心に道を學んで、大勇猛を發せば、決して菩提に越かん。

阿毘達磨論(二十二卷)

菩薩、底沙佛の時に於て、十指掌を合せ、一足を翹げて、一伽陀を以て、七日七夜、佛の功德を歎す。便ち九劫を超ゆ。

評して曰く。此れを觀れば、則ち法集に稱する所の、一日の精進、百年の懈怠に勝ると、信なる哉言乎。

西域記(第二の)

脇尊者、八十にして出家す、少年誦つて曰く、夫れ出家の業は、一には則ち禪を習ひ、二には則ち經を誦す、而今衰老、何の進取する所あらん。尊者、聞いて誓つて曰く、我れ若し三藏の經に通せず、三界の欲を斷じ、六神通を得て、八解脱を具せずんば、終に脇を以て席に至らずと。乃ち晝は則ち教理を研習し、夜は則ち靜慮して神を凝し、三年にして悉く誓ふ所を證す。時の人、敬仰して、脇尊者と號す。

評して曰く。嬰鏢たる是の翁、懈怠の比丘を激勸するに足れり。當に知るべし、今人は、豈に但だ八十のみならんや、縱饒ひ直に期願に抵るも、尙ほ須らく努力脩進すべし。

此に因つて名を立て藥上と爲す云云。
生死の苦を離れ、涅槃の樂を得る、此れを眞諦と云ふ。
阿毘曇、無比法と翻す、小乘論なり。
瑜伽此に相應と云ふ、一切境心と相應、一切行理と相應、三乘果位中、諸功德更に相應、順果相應、師は親行の人、地は所行の境界。

阿毘達磨論は小乘經なり。
三藏は經、律、論。
三界は欲界、色界、無色界。
嬰鏢は、老壯の貌、此の語は本、後漢の光武皇帝が馬授の老健を稱したる故事なり。
期願は曲禮に百年の事を云ふ。

① 南海寄歸(卷四の)

善遇法師、佛を念じて、四儀間無く、寸陰も空くせず、小萱粒を計へて、兩載に盈つ可し。

法苑珠林

陳の棲霞寺の沙門惠布、寺の舍利塔の西に居り、經行、坐禪、誓つて坐臥せず、衆徒八十、咸く院を出でず。(惠布、一本には) (智聰とあり。)

觀心論疏

夫れ小事を建てんと欲するに、心決至せざれば、尙ほ成すこと能はず、況んや、五住の重關を排し、生死の大海を度らんと欲するをや。勤勞せずんば、妙道何に由つてか契ふべき。

永嘉集

至道を勤求して、形命を顧みず。○晝夜般若を行じて、生生勤め精進して、常に頭燃を救ふが如くせよ。

鴻山警策

法理を研窮し、悟を以て則と爲す。評して曰く。則は準なり、悟を以て準的と爲すなり。即ち宗門に參禪し

て甚麼の處にか到ると謂ふ、是歇工の處なり。今大悟して乃ち已むといふ、悟らすんば已まざるなり。

淨土懺願儀(蓮式四)

若しくは坐、若しくは行、皆散亂すること勿れ、彈指の頃も世の五慾を念じ、及び外人に接對し、語論戲笑することを得ざれ。亦事に託して延緩し、放逸にして睡眠することを得ざれ。當に瞬息俯仰に於て、念に繋けて斷たざるべし。

法界次第

倍策つて精進し、勤求して息まず、是れを精神根と名く。

心賦註

堅く至道を求めて、曉夕疲るゝこと亡く、外に向つて求めず、襟を虚しうし慮を澄し、密室に靜坐し、端拱して神を寧んず。

評して曰く。淨業の弟子、外に向つて求めず、密室に靜坐するの說を見て、便ち念佛を必とせずと謂ふこと莫れ。須らく知るべし、念の字は心に從ふ、佛は即ち自己なり、自心を以て自己を念す、焉んぞ外に求むると爲るを得んや。況んや之れを念じて已まざれば、則ち三昧を成するをや、靜密就ぞ加へん。

國譯禪關策進卷の四終

①具に南海寄歸内法傳と云ふ、西域の言を取り、換易へて東方の語と爲し歸るなり、王制に東方を寄と云ふ、註に、東方言を通するの言、東方の言を傳寄するを謂ふなり、北方に譯と云ふ、傳は四夷の言を譯する者なり。
②即ち義淨三藏の觀心論疏なり。
③三界一切の見惑を一住と爲し、三界の思惑を分ちて三住と爲し、根本無明を一住と爲す。
④台元の二に、永嘉眞覺大師は、法を大祖慧能大師に嗣ぐ、永嘉集二卷を著し、叢林に行はる。
⑤鴻山靈祐禪師は、南嶽下四世なり、法を百丈大智禪師に嗣ぐ。

⑥法門次第、三卷あり、法門の淺深昇降の次第を記す。
⑦本註二十三紙、莫比商人の賣の註の語なり、跋に智覺禪師心賦諸經の語を集して自ら註すとあり。

國譯禪關策進後序

古人曰く、「明窓下に古教照心し、僧堂前に坐禪辨道す、猶は車の兩輪の如くにして、始めて祖意と相應す可きなり。」と、大凡そ照心無きの辨道は、必らず小見に止る。彼の二乘外道、并に悪知識の類是れなり。辨道無きの照心は、悉く學解に落つ。今の教律神儒及び祖師禪は、蓋し之れを出でざるなり。是の故に眞正の道人の如き、正坐禪を以て根塵を研窮し、眞の古教を以て定慧を精鍊す。況んや怠慢を鞭策し、中止を激發するに至つては、佛祖の先鑑、仰いで以て依行す可し。吾が闡提老翁、幼よりして泥犁の苦境を聞いて、頻に解脱を求めしより已來、神に祈り佛に誓つて水火も怖れず、身を責め心を苦めて寢食稍廢す。一朝法華經の因緣譬喩の説を見、錯つて取るに足らずと爲して、力を失ふこと三四年なり。①十九歳の夏、禪叢の衆寮に在つて、因に巖頭和尚末後賊の爲に害せられて、大叫一聲數里の外に聞ゆと云ふを見て、又大いに志を失ふて、以爲らく、現在の害すら、尙ほ轉すること能はず、況んや泥犁に於てをや。古人秀逸の者已に是くの如きときは、則ち我輩何ぞ免脱を得ん。嗟呼、佛法虛誕

①年譜に云く元祿十六年師十九歳、春大聖を辭し、州の清水郷に抵り、錫を禪叢衆寮に挂く、一衆文字に孜孜たり、師獨り道の爲に禮誦を事と爲す、時に堂頭千英衆の爲に江湖集を講す、一日僧渡子の颯出づ、巖頭大衆禪師傳に末後賊の爲に害せられて云云。
②泥犁は地獄なり。

參禪實無し。僧也俗也、我れ進むに期する所無く、退くに差づる所有りと。是に於て志を改め意を放にして、惡見日に加ふ。次の年、濃の瑞雲に至つて馬翁に従事す、溫馬山の輩と伴を結んで互に詩文を論ず。一日間坐の次、翻然として思うて曰く、「身、僧にして俗事を嗜み、志、俗にして僧倫に預る、大丈夫恁麼に打過して亦保せざる處有り」と。時、晒書の節に當つて、内外の經籍堆して堂上に在り。翁竊に往いて禮拜懇禱して曰く、「儒佛老莊諸家の道我れ何を以て師と爲さん、願くは護法の天龍、我に正路を示せ」と。目を閉ぢ良久しうして把著して一小冊を得たり、禪關策進と名く。頂受して之れを披けば即ち引錐自刺の章に撞著す。且つ其の考記に曰く、「昔慈明汾陽に在りし時、大愚、榔瑯等の六七人と伴を結んで參究す。河東苦寒なり、衆人之れを憚る、明獨り通宵坐して睡らず、自ら責て曰く、「古人の刻苦光明必らず盛大なり、我又何人ぞ、生きて時に益無く、死して人に知られず、理に於て何の益有らん」と、即ち錐を引いて自ら其の股を刺す」と。翁、此に至つて志氣憤激して醍醐を呑むが如し。遂に其の書を馬翁に乞ひ求めて、常に照心辨道の友と爲し、行住相隨ふ。是れより巖頭の醜面目を踏開して根塵剝落し、道鏡の惡毒手に觸著して見地喪盡す。年不惑を過ぎ鷲嶺の藏秘を見徹し、齡耳順に近うして龍峰の家私を闡揚す。其の道天下の稍僧を走殺し、其の德王侯士庶を驚動する者は、皆他の

③年譜に云く、十七年師二十歳澧州檜木の瑞雲に抵り、馬翁に従事す、時に磔上座有り、先より錫を挂く、本體前岡山侯備臣熊澤龍海の子にして師と見を同じうし、嘗て斷金の盟を結び互に詩文を究む、一日思謂へらく、恁麼に打過するも亦未穩在、時曬書に當り云云。

囊中貯ふ所の一箇の策進に出づる者か。是の故に翁、常に慈明の語を讀して學者を誡めて曰く、「老僧少き時、日に此の語を三復して及ばざるなり、今老いたり、止ぬる哉。」又曰く、「雲栖一生の文字、但だ此の書のみ、吾宗に補有り、汝等他日、功、餘力有らば再び之れを刊行して以て祝融の恨を報せよ。然りと雖も此書、間念佛を以て自己を參究せしむ。是れ則ち是れ甚だ禪僧の穎氣を奪つて往生門に落つる者少からず。若し老僧の意に依らば、一齊に削り去つて可なり。何の故ぞ、獅子鷓鴣を食はず、猛虎伏肉を餐せず、往生の一機は他の淨家に還す、禪僧門下實智すら尙ほ要せず、何んぞ況んや假名をや。耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪つて、始めて以て眞の參詳と爲す可き而已。」客歲辛巳の冬參學虎上座、同友二三子と力を戮せて翁の志を補はんと欲す。便ち林氏渡氏等の檀信有り、遂に淨財を捨て其の議を玉成す。是に於て予に數語を加へ、以て來由を辨せんことを請ふ。仍つて先に親しく聞く所の事實許多を記して、遠く之れを不朽に傳ふと云ふ。寶曆十二年龍壬午に集る孟正の日、豆の龍澤に住する 東嶺頭陀圓慈恭しく書す。

東嶺和尚は、白隱老漢の駭足にして、深く教義の内外に通じ、辛苦して白隱に嗣法す。白隱と雖も常に師を推賞して止まざりき。東嶺の名著として、後昆に最も裨益を與へたるものは、有名なる五家參詳要路門にして、その平常底は頗る綿綿密密にて、密細東嶺の稱あり。

禪關策進序

禪曷爲有闢乎、道無内外無出入、而人之爲道也、有迷悟、於是大知識關吏、不得不時其啓閉、慎其鎖鑰、嚴其勘覈、俾異言服私、越度者無所售其奸、而關之不易透亦已久矣、予初出家得、一帙於坊間、曰禪門佛祖綱目、中所載、多古尊宿自敘、其參學時、始之難入、中之倣工夫、經歷勞苦、次第與終之廓爾、神悟心愛之慕之、願學焉、既而此書於他處、更不再見、乃續閱五燈諸語錄、雜傳、無論縑素、但實參實悟者、併入前帙、刪繁取要、彙之成編、易名曰禪關策進、居則置案、行則携囊、一覽之則、心志激勵、神采煥發、勢自鞭逼、前進、或曰、是編也、爲未過關者設也、已過關者、長往矣、將安用之、雖然、關之外、有重關焉、託僞於雞聲、暫離於虎口、得少爲足、是爲增上慢人、水未窮山、未盡警策、在手疾驅而長馳、破最後之幽關、徐而作罷參齋、未晚也。

萬曆二十八年歲次庚子孟春日

雲棲 株宏 識

禪關策進卷之一

後學雲棲寺沙門祿宏輯

前集 二門

諸祖法語節要第一

諸祖法語，今不取向上玄談，唯取做工夫喫緊處，又節其要略，以便時時省覽，激勵身心，次二諸祖苦功，後集諸經引證，俱做此。

筠州黃檗運禪師示衆

預前若打不徹，臘月三十日到來，管取爾熱亂，有般外道，纔見人做工夫，便冷啖，猶有這箇在，我且問爾，忽然臨命終時，爾將何抵敵生死？須是問時辨得下，忙時得用，多少省力，休待臨渴掘井，做手脚不迭，前路茫茫，胡鑽亂撞，苦哉苦哉，平日只學口頭三昧，說禪說道，呵佛罵祖，到這裡都用不著，只管瞞人，爭知今日自瞞了也，勸爾兄弟家，趁色力康健時，討取箇分曉，這些關板子，甚是容易，自是爾不肯去，下死志做工夫，只管道難了，又難，若是丈夫漢，看箇公案，僧問趙州，狗子還有佛性也無？州云無，但二六時中看箇無字，晝參夜參，行住坐臥，著衣喫飯處，屙屎放尿處，心心相顧，猛著精彩，守箇無字，日久歲深，打成一片，忽然心華頓發，悟佛祖之機。

便不被天下老和尚舌頭瞞，便會開口，達磨西來，無風起浪，世尊拈華，一場敗闕，到這裡說甚閻羅老子，千聖尚不奈何，不信道直有這般奇特，爲甚如此，事怕有心人。評曰：此後代提公案看話頭之始也，然不必執定無字，或無字，或萬法，或須彌山，或死了燒了等，或參究念佛，隨守一則，以悟爲期，所疑不同，悟則無二。

趙州諗禪師示衆

汝但究理，坐看三二十年，若不會，截取老僧頭去。○老僧四十年不雜用心，除二時粥飯，是雜用心處。

玄沙備禪師示衆

夫學般若菩薩，具大根器，有大智慧，始得若根機遲鈍，直須勤苦忍耐，日夜忘疲，如喪考妣，相似，恁麼急切，更得人荷挾，尅骨究實，不妨亦得觀去。

鷲湖大義禪師垂誡

莫只忘形與死心，此箇難醫病最深，直須提起吹毛利，要剖西來第一義，瞠却眼兮剔起眉，反覆看渠渠，是誰，若人靜坐不用功，何年及第悟心空。

永明壽禪師垂誡

學道之門，別無奇特，只要洗滌根塵下，無量劫來業識種子，汝等但能消除情念，斷絕妄緣，對世間一切愛欲境界，心如木石相似，直饒未明道眼，自然成就淨身，若逢真正導師，切須勤心親近，假使參而未徹，學而未成，歷在耳根，永爲道種，世世不落惡趣，生生不失人身，纔出頭來，

一聞千悟

黃龍死心新禪師小參

諸上座，人身難得，佛法難聞，此身不向今生度，更向何生度，此身備諸人要參禪麼，須是放下著，放下箇甚麼，放下箇四大五蘊，放下無量劫來許多業識，向自己脚跟下推窮看，是甚麼道理，推來推去，忽然心華發明，照十方刹，可謂得之於心，應之於手，便能變大地作黃金，攪長河爲酥酪，豈不暢快平生，莫只管冊子上念言語，討禪討道，禪道不在冊子上，縱饒念得一大藏經，諸子百家，也只是間言語，臨死之時，總用不著。

評曰：不可見恁麼說，便謗經毀法，蓋此語爲着文字而不修行者戒也，非爲不識一丁者立赤轍也。

東山演禪師送徒行脚

須將生死二字貼在額頭上，討取箇分曉，如只隨群作隊，打哄過日，他時問老子打算飯錢，莫道我不曾說與爾來，若是做工夫，須要時時檢點，刻刻提撕，那裏是得力處，那裏是不得力處，那裏是打失處，那裏是不打失處，有一等纔上蒲團，便打瞌睡，及至醒來，胡思亂想，纔下蒲團，便說雜話，如此辨道，直至彌勒下生，也未得入手，須是猛着精彩，提箇話頭，晝參夜參，與他厮捱，不可坐在無事甲裏，又不可蒲團上死坐，若雜念轉鬪轉多，輕輕放下，下地走一遭，再上蒲團，團開兩眼，捏兩拳，豎起脊梁，依前提起話頭，便覺清凉，如一鍋沸湯，攪一杓冷水相似，如此做工夫，定有到家時節。

佛跡願庵真禪師普說

信有十分，疑有十分，疑有十分，悟有十分，可將平生所見所聞，惡知惡解，奇言妙句，禪道佛法，貢高我慢等心，徹底傾瀉，只就未明未了的公案上，距定脚頭，豎起脊梁，無分晝夜，直得東西不辨，南北不分，如有氣的死人，相似，心隨境化，觸著還知，自然念慮內忘，心識路絕，忽然打破，獨體元來，不從他得，那時豈不慶快平生者哉。

徑山大慧杲禪師答問

今時有自眼不明，只管教人死鴉狙地休去歇去，又教人隨緣管帶，忘情默照，又教人是事莫管，如是諸病，枉用工夫，無有了期，但只存心一處，無有不得者，時節因緣到來，自然觸着磕著，噴地醒去。○把自家心識緣，世間塵勞的，回來底在般若上，縱今生打未徹，臨命終時，定不爲惡業所牽，來生出頭，定在般若中，見成受用，此是決定的事，無可疑者。○但自時時提撕，妄念起時，亦不必將心止遏，只看箇話頭，行也提撕坐也提撕，來提撕去，沒滋味，那時便是好處，不得放捨，忽然心華發明，照十方刹，便能於一毛端，現寶王刹，坐微塵裏，轉大法輪。評曰：師自云，他人先定而後慧，某甲先慧而後定，蓋話頭疑破，所謂休去歇去者，不期然而然矣。

蒙山異禪師示衆

某年二十，知有此事，至三十二，請益十七八員長老，問他做工夫，都無端的，後參皖山長老，教看無字，十二時中，要惺惺如貓捕鼠，如鷄抱卵，無令間斷，未透徹時，如鼠咬棺材，不可移易，如

此做去，定有發明時節，於是晝夜孜孜體究，經十八日，吃茶次，忽會得世尊拈花迦葉微笑，不勝歡喜，求決三四員長老，俱無一語，或教只以海印三昧，一印印定，餘俱莫管，便信此說，過了二載，景定五年六月，在四川重慶府患病，晝夜百次，危劇瀕死，全不得力，海印三昧，也用不得，從前解會的，也用不得，有口說不得，有身動不得，有死而已，業緣境界，俱時現前，怕怖惶惶，衆苦交逼，遂強作主宰，分付後事，高着蒲團，裝一爐香，徐起坐定，默禱三寶龍天，悔過從前諸不善業，若大限當盡，願承般若力，正念托生，早早出家，若得病愈，便棄俗爲僧，早得悟明，度後學，作此願已，提箇無字，回光自看，未久之間，臟腑三四回動，只不管他，良久眼皮不動，又良久不見有身，只話頭不絕，至晚方起，病退一半，復坐至三更四點，諸病盡退，身心輕安，八月至江陵，落髮，一年起單行脚，途中炊飯，悟得工夫，須是一氣做成，不可斷續，到黃龍歸堂，第一次睡魔來時，就座抖擻精神，輕輕敵退，第二次亦如是退，第三次睡魔重時，下地禮拜消遣，再上蒲團，規式已定，便趁此時，打併睡魔，初用枕短睡，後用臂，後不放倒身，過二三夜，日夜皆倦，脚下浮逼逼地，忽然眼前如黑雲開，自身如新浴出，一般清快，心下疑團愈盛，不著用力，綿綿現前，一切聲色五慾八風，皆入不得清淨，如銀盆盛雪相似，如秋空氣肅相似，却思工夫，雖好無可決擇，起單入浙，在路辛苦，工夫退失，至承天孤蟾和尚處歸堂，自誓未得悟明，斷不起單，月餘工夫復舊，其時偏身生瘡，亦不顧，捨命趁透工夫，自然得力，又做得病中工夫，因赴齋出門，提話頭而行，不覺行過齋家，又做得動中工夫，到此却似透水月華，急灘之上，亂波之中，觸不散，蕩不失，活鱗鱗地，三月初六日坐中，正舉無字，首座入堂燒香，打香盒作聲，忽然因地一聲，識

得自己捉敗趙州遂頌云：沒興路頭窮，踏翻波是水。超群老趙州，面目只如此。秋間臨安見雪巖，退耕石帆，虛舟諸大老，舟勸往皖山，山問：光明寂照徧河沙，豈不是張拙秀才語？某開口，山便喝出，自此行坐飲食皆無意思。經六箇月，次年春，因出城回，上石梯子，忽然胸次疑礙冰釋，不知有身在路上，乃見山，山又問前語，某便掀倒禪床，却將從前數則極誦訛公案，一一曉了。諸仁者參禪大須仔細，山僧若不得重慶一病，幾乎虛度，要緊在遇正知見人，所以古人朝參暮請，決擇身心，孜孜切切，究明此事。

楊州素菴田大士示衆

評曰：他人因病而退情，此老帶病而精修，終成大器，豈徒然哉！禪人病中當以是痛自勉勵。近來篤志參禪者少，纔參箇話頭，便被昏散二魔纏縛，不知昏散與疑情正相對治，信心重則疑情必重，疑情重則昏散自無。

處州白雲無量滄禪師普說

二六時中，隨話頭而行，隨話頭而住，隨話頭而坐，隨話頭而臥，心如棘栗蓬相似，不被一切人我無明五慾三毒等之所吞噉，行住坐臥，通身是箇疑團，疑來疑去，終日呆椿椿地，聞聲觀色，管取因地一聲去在。

四明用剛軟禪師答禪人書

做工夫須要起大疑情，汝工夫未有一月半月成片，若真疑現前，撼搖不動，自然不怕惡亂，只管勇猛忿去，終日如呆的漢子相似，到恁麼時，不怕甕中走鼈。

袁州雪巖欽禪師普說

時不待人轉眼，便是來生，何不趁身強力健，打教徹去，討教明白去，何幸又得在此名山大澤，神龍世界，祖師法窟，僧堂明淨，粥飯精潔，湯火穩便，若不向這裏打教徹，討教明白去，是爾自暴自棄，自甘陸沉，爲下劣愚痴之漢，若果是茫無所知，何不博問先知，凡遇五參，見曲柔床上老漢橫說豎說，何不歷在耳根，反覆尋思，畢竟是箇甚麼道理。○山僧五歲出家，在上人侍下，見與賓客交談，便知有此事，便信得及，便學坐禪，十六爲僧，十八行脚，在雙林遠和尚會下，打十方從朝至暮，不出戶庭，縱入衆寮，至後架，袖手當胸，不左右顧，目前所視，不過三尺，初看無字，忽於念頭起處，打一箇返觀，這一念當下冰冷，直是澄澄湛湛，不動不搖，過一日如彈指頃，都不聞鐘鼓之聲，十九在靈隱挂搭，見處州來書記說：欽禪師這工夫是死水，不濟事，動靜二相，打作兩橛，參禪須是起疑情，小疑小悟，大疑大悟，被州說得著，便改了話頭，看箇乾屎橛，一味東疑西疑，橫看豎看，却被昏散交攻，頃刻潔淨，也不能得，移單過淨慈，結甲七箇兄弟坐禪，封被脇不沾席，外有修上座，每日在蒲團上，如箇鐵橛子相似，地上行時，開兩眼，垂兩臂，亦如箇鐵橛子相似，要與親近說話，更不可得，因兩年不倒身，捱得昏困，逐一放都放了，兩月後，從前整頓得這一放，十分精神，元來要究明此事，不睡也不得，須是到中夜熟睡一覺，方有精神，一日廊下見修，方得親近，却問：去年要與爾說話，只管避我如何？修云：真正辨道人，無剪爪之工，更與爾說話在，因問：卽今昏散打屏不去，修道爾自不猛烈，須是高著蒲團，豎起脊梁，盡渾身併作一箇話頭，更討甚昏散，依修做工夫，不覺身心俱忘，清清三晝夜，兩眼不交睫，第三日午

後在三門下如坐而行，又撞見修，問：「爾在此做甚麼？」答云：「辨道。」修云：「爾喚甚麼作道，遂不能對轉，加迷悶，即欲歸堂坐禪，又撞見首座道備，但大開了眼，看是甚麼道理，又被提這一句，只欲歸堂，纔上蒲團，面前豁然一開，如地陷一般，是時呈似人，不得，非世間一切相可喻，便下單尋修，修見便道：「且喜且喜，握手門前柳堤上行一轉，俯仰天地間，森羅萬象，眼見耳聞，向來所厭所棄之物，與無煩惱，元來都是自己妙明真性中流出，半月餘動相不生，可惜不遇大手眼尊宿，不合向這裏坐住，謂之見地不脫。」礙正知見，每於睡著時，打作兩橛，公案有義路者，則理會得，如銀山鐵壁者，却又不會，雖在無準先師會下，多年入室陞座，無一語打著心下事，經教語錄上，亦無一語可解此病，如是礙在胸中者，十年一日在天目佛殿上行，擡眼見一株古柏，觸目省發，向來所得境界，礙膺之物，撲然而散，如閻室中出在白日，從此不疑生，不疑死，不疑佛，不疑祖，始得見徑山老人立地處，好與三十拄杖。

禪關策進卷之一終

禪關策進卷之二

天目高峯妙禪師示衆

此事只要當人的有切心，纔有切心，真疑便起，疑來疑去，不疑自疑，從朝至暮，粘頭綴尾，打成一片，撼亦不動，趁亦不去，昭昭靈靈，常現在前，此便是得力時也，更須確其正念，慎無二心，至於行不知行，坐不知坐，寒熱饑渴，悉皆不知，此境界現前，即是到家消息也，也得構也，撮得著，只待時刻而已，却不得見，怎麼說起，一念精進心，求之，又不得，將心待之，又不得，縱之，棄之，但自堅疑正念，以悟爲則，當此之時，有八萬四千魔軍，在汝六根門頭伺候，一切奇異善惡等事，隨汝心現，汝若瞥起，毫釐著心，便墮他圈，被他作主，受他指揮，口說魔話，身行魔事，般若正因，從茲永絕，菩提種子，不復生芽，但莫起心，如箇守屍鬼子，守來守去，疑團子，欸然爆地一聲，管取驚天動地。○某甲十五出家，二十更衣入淨慈，立三年死限學禪，初參斷橋和尚，令參生從何來，死從何去，意分兩路，心不歸一，後見雪巖和尚，教看無字，又令每日上來一轉，如人行路，日日要見工程，因見說得有序，後竟不問做處，一入門，便問誰與，備拖這死屍來，聲未絕，便打出，次後徑山歸堂，夢中忽憶萬法歸一，一歸何處，自此疑情頓發，直得東西不辨，南北不分，第六日隨衆閣上，諷經，擡頭忽覩五祖演和尚真贊，末兩句云：「百年三萬六千朝，反覆元來是這漢，日前拖死屍，句子，驀然打破，直得魂飛膽喪，絕後再甦，何曾放下百二十斤擔子，其時正

二十四歲滿三年限，次後被問：日間浩浩作得主麼？答曰：作得。又問：睡夢中作得主麼？答云：作得。又問：正睡著無夢時，主在何處？於此無言可對，無理可伸，和尚囑云：從今不要偏學佛學法，窮古窮今，只饑來吃飯，困來打眠，纔眠覺來，抖擻精神，我這一覺，主人公畢竟在甚麼處？安身立命，自誓拚一生做箇癡漢，定要見這一著子明白。經及五年，一日睡覺，正疑此事，忽同宿道友推枕子落地作聲，驀然打破疑團，如在網羅中跳出，所有佛祖誦訛公案，古今差別因緣，無不了了。自此安邦定國，天下太平，一念無爲，十方坐斷。

評曰：前示衆做工夫一段，至爲切要，學者宜書諸紳，其自叙中所云饑來吃飯，困來打眠，是發明以後事，莫錯會好。

鐵山瓊禪師普說

山僧十三歲知有佛法，十八出家，二十二爲僧，先到石霜，記得祥庵主教時，時觀見鼻頭白，遂得清淨，後有僧自雪巖來，寫得巖坐禪箴，看我做工夫，卻不會從這裏過，因到雪巖，依彼所說做工夫，單提無字，至第四夜通身汗流，十分清爽，繼得歸堂，不與人說話，專一坐禪，後見妙高峰，教十二時中，莫令有間，四更起來，便摸索話頭，頓在面前，略覺困睡，便起身下地，也是話頭，行時步步不離話頭，開單展鉢，拈匙放筯，隨衆等事，總不離話頭，日間夜間，亦復如是，打成片段，未有不發明者，依峰開示做工夫，果得成片，三月二十日，巖上堂云：兄弟家久在蒲團上睡，須下地走一遭，冷水盥漱，洗開兩眼，再上蒲團，豎起脊梁，壁立萬仞，單提話頭，如是用功，七日決定悟去，此是山僧四十年前已用之工，某即依彼所說，便覺工夫異常，第二日，兩眼欲閉，而不能閉，第三日，此身如在虛空中行，第四日，曾不知有世間事，其夜倚欄杆少立，泯然無知，檢點話頭，又不打失，轉身上蒲團，忽覺從頭至足，如劈破燭體相似，如萬丈井底，被提在空中，相似，此時無著歡喜處，舉似巖云：未在，更去做工夫，求得法語，末後云：紹隆佛祖向上事，腦後依前欠一槌，心下道：如何又欠一槌？不信此語，又似有疑，終不能決，每日堆堆坐禪，將及半載，一日因頭痛煎藥，遇覺赤鼻，問那吒太子析骨還父，析肉還母話，記得被悟知客問：不能對，忽然打破這疑團，後到蒙山，山問：參禪到甚麼處？是畢工處？遂不知頭，山教再做定力工夫，洗盪塵習，每遇入室下語，只道欠在，一日晡時坐至更盡，以定力挨拶，直造幽微，出定見山說：此境已，山問：那箇是爾本來面目？正欲下語，山便閉門，自此工夫日有妙處，蓋以離巖太早，不會做得細密工夫，幸遇本色宗匠，乃得到此，元來工夫做得緊峭，則時時有悟入，步步有剝落，一日見壁上三祖信心銘云：歸根得旨，隨照失宗，又剝了一層，山云：箇事如剝珠相似，愈剝愈光，愈明愈淨，剝一剝，勝他幾生工夫也，但下語猶只道欠在，一日定中，忽觸著欠字，身心豁然徹骨徹髓，如積雪卒然開霽，忍俊不禁，跳下地來，擒住山云：我欠少箇甚麼？山打三掌，某禮三拜，山云：鐵山這一著子幾年，今日方了。○暫時話頭不在，如同死人，一切境界逼迫臨身，但將話頭與之抵當，時時檢點話頭，動中靜中，得力不得力，又定中不可忘却話頭，忘話頭，則成邪定，不得將心待悟，不得文字上取解會，不得些少覺觸，以爲了事，但教如痴如呆去，佛法世法，打成一片，施爲舉措，只是尋常，惟改舊時行履處，古云：大道從來不屬言，擬談玄妙隔天淵，直須能所俱忘却，始可饑食困則眠。

天目斷崖義禪師示衆

若要超凡入聖，永脫塵勞，直須去皮換骨，絕後再甦。如寒灰發燭，枯木重榮，豈可作容易想。我在先師會下多年，每被大棒，無一念遠離心。直至今日，觸著痛處，不覺淚流，豈似偏等咬著些子苦味，便掉頭不顧。

天目中峯本禪師示衆

先師高峯和尚，教人惟以所參話頭，蘊之於懷，行也如是，參坐也如是，參到用力不及處，留意不得時，驀忽打脫，方知成佛，其來舊矣。這一著子，是從上佛祖了生脫死之已驗。三昧惟貴信得及，久遠不退轉，更無有不獲其相應者。○看話頭做工夫，最是立脚穩當，悟處親切，縱此生不悟，但信心不退不轉，一生兩生，更無不獲開悟者。○或三十年二十年，未即開悟，不須別求方便，但心不異緣，意絕諸妄，孜孜不捨，只向所參話上立定脚頭，拚取生與同生，死與同死，誰管三生五生，十生百生，若不徹悟，決定不休，有此正因，不患大事之不了明也。○病中做工夫，也不要備精進勇猛，也不要備撐眉努目，但要備心如木石，意若死灰，將四大幻身，撇向他方世界之外，由他病也得活，也得死，也得有人看，也得無人看，也得香鮮也得，臭爛也得，醫得健來，活到一百二十歲也得，如或便死，被宿業牽入鑊湯爐炭裏，也得如是境界中，都不動搖，但切切將箇沒滋味話頭，向藥爐邊，枕頭上，默默咨參，不得放捨。

評曰：此老千言萬語，只教人看話頭，做工夫，以期待正悟，諄切透快，千載而下，如耳提面命，具存全書，自應徧覽。

師子峰天如則禪師普說

生不知來處，謂之生大，死不知去處，謂之死大。臘月三十日到來，只落得手忙脚亂，何況前路茫茫，隨業受報，正是要緊事。在這箇是生死報境，若論生死業根，即今一念隨聲逐色，使得七顛八倒者，便是。由是佛祖，運大慈悲，或教備參禪，或教備念佛，令汝掃除妄念，認取本來面目，做箇洒洒落落大解脫漢。而今不獲靈驗者，有三種病：第一不遇真善知識指示，第二不能痛將生死大事為念，悠悠漾漾，不覺打在無事甲裏，第三於世間虛名浮利，照不破，放不下，妄緣惡習上坐不斷，擺不脫，境風扇動處，不覺和身輾入業海中，東飄西泊去，真正道流，豈肯恁麼當信祖師道，雜念紛飛，如何下手，一箇話頭，如鏡掃帚，轉掃轉多，轉多轉掃，掃不得，拚命掃，忽然掃破太虛空，萬別千差一路通，諸禪德努力，今生須了却，莫教永劫受餘殃。○又有自疑念佛與參禪不同，不知參禪只圖識心見性，念佛者悟自性彌陀，唯心淨土，豈有二理。經云：憶佛念佛，現前當來，必定見佛。既曰現前見佛，則與參禪悟道，有何異哉。○答或問云：但將阿彌陀佛四字，做箇話頭，二六時中，直下提撕，至於一念不生，不涉階梯，徑超佛地。

智徹禪師淨土玄門

念佛一聲，或三五七聲，默默返問，這一聲佛，從何處起，又問這念佛的是誰，有疑只管疑去，若問處不親，疑情不切，再舉箇畢竟這念佛的是誰，於前一問少問少疑，只向念佛是誰，諦審諦問。

評曰：徑無前問，只看這念佛的是誰，亦得。

汝州香山無聞聰禪師普說

山僧初見獨翁和尚，令參不是心，不是佛，不是物。後同雲峯月山等六人立願，互相究竟。次見淮西教無能，令提無字。次到長蘆，結伴煉磨。後遇淮上敬兄，問云：備六七年，有甚見地？某答：每日只是心下無一物。敬云：備這一絡索，甚處出來？某心裏似知，不知不敢開口。敬見我做處無省發，乃云：備定中工夫，不失動處便失。某被說著，心驚，便問：畢竟明此大事，應作麼生？敬云：備不聞川老子道，要知端的意，北斗面南看，說了便去。某被一問，直得行不知行，坐不知坐，五七日間，不提無字，倒只看要知端的意，北斗面南看，忽到淨頭寮，在一木上與衆同坐，只是疑情不解。有飯食頃，頓覺心中空亮，輕清，見情想破裂，如剝皮相似。目前人物，一切不見，猶如虛空。半時省來，通身汗流，便悟得北斗面南看，遂見敬下語作頌，都無滯礙。尚有向上一路，不得洒落。後入香巖山中，過夏，被蚊子咬兩手不定，因念古人爲法忘軀，何怖蚊子？盡情放下，咬定牙關，捏定拳頭，單提無字，忍之又忍，不覺身心歸寂。如一座屋倒，却四壁體若虛空，無一物可當情。辰時一坐，未時出定，自知佛法不悞人，自是工夫不到，然雖見解明白，尚有微細隱密妄想未盡。又入光州山中，習定六年。陸安山中，又住六年。光州山中，又住三年，方得顛脫。評曰：古人如是勤辛，如是久遠，方得相應。今人以聰明情量，剎那領會，而猶欲自附於頓悟，豈不謬哉。

獨峯和尚示衆

學道之士，那裏是入手處？提箇話頭，是入手處。

般若和尚示衆

兄弟家，三年五年做工夫，無箇入處，將從前話頭拋却，不知行到中途而廢，可惜。前來許多心機，有志之士，看衆中柴乾水便，僧堂溫暖，發願三年不出門，決定有箇受用。有等纔做工夫，心地清淨，但見境物現前，便成四句，將謂是大了當人，口快舌便，悞了一生。三寸氣消，將何保任？佛子若欲出離，參須真參，悟須實悟。○或話頭綿密，無有間斷，不知有身，謂之人忘法，未忘有到此忘其本身，忽然記得，如在夢中，跌下萬仞洪崖，只顧救命，遂成風癩。到此須是緊提話頭，忽然連話頭都忘，謂之人法雙忘，驀地冷灰豆爆，始知張公吃酒，李公醉，正好來般若門下吃棒，何以故？更須打破諸祖重關，遍參知識，得知一切淺深，却向水邊林下，保養聖胎，直待龍天推出，方可出來，扶揚宗教，普度群生。

雪庭和尚示衆

十二時中，一貧如洗，看箇父母未生前，那箇是我本來面目，不管得力不得力，昏散不昏散，只管提撕去。

仰山古梅友禪師示衆

須要發勇猛心，立決定志，將平生悟得的，學得的一切佛法，四六文章，語言三昧，一掃掃向大洋海裏去，更莫舉著。把八萬四千微細念頭，一坐坐斷，卻將本參話頭，一提提起，疑來疑去，抄來抄去，疑定身心，討箇分曉，以悟爲則，不可向公案上下度，經書上尋覓，直須卒地斷，爆地拆，方始到家。若是話頭提不起，連舉三遍，便覺有力。若身力疲倦，心識惛燥，卻輕輕下地打一轉。

再上蒲團，將本參話，如前挨拶，若纔上蒲團，便打瞌睡，開得眼來，胡思亂想，轉身下地，三三兩兩，交頭接耳，大語細話，記取一肚皮語錄經書，逞能舌辯，如此用心，臘月三十日到來，總用不著。

衢州傑峯愚禪師示五臺善講主

假饒文珠放金色光，與汝摩頂，師子被懶騎來，觀音現千手眼，鸚哥被懶捉得，皆是逐色隨聲，於懶自己有何利益，要明己躬大事，透脫生死牢關，先須截斷一切聖凡虛妄見解，十二時中，回光返照，但看箇不是心，不是物，不是佛，是箇甚麼，切莫向外邊尋討，設有一毫佛法神通聖解，如粟米粒大，皆爲自欺，總是謗佛謗法，直須參到脫體無依，纖毫不立處，著得隻眼，便見青州布衫，鎮州蘿蔔，皆是自家所用之物，更不須別求神通聖解也。

靈隱瞎堂禪師對制

宋孝宗皇帝問如何免得生死，對曰：不悟大乘道，終不能免。又問如何得悟，對曰：本有之性，以歲月磨之，無不悟者。

大乘山普巖斷岸和尚示衆

萬法歸一，一歸何處，不得不看話頭，守空靜而坐，不得念話頭，無疑而坐，如有昏散，不用起念排遣，快便舉起話頭，抖擻身心，猛著精采，更不然下地經行，覺昏散去，再上蒲團，忽爾不舉自舉，不疑自疑，行不知行，坐不知坐，惟有參情，孤孤迥迥，歷歷明明，是名斷煩惱處，亦名我喪處，雖然如是，未爲究竟，再加鞭策，看箇一歸何處，到這裏提撕話頭，無節次了也，惟有疑情，忘即

舉之，直至返照心盡，是名法亡，始到無心處也，莫是究竟麼，古云：莫謂無心便是道，無心猶隔一重關，忽地遇聲遇色，磕著撞著，大喚一聲，轉身過來，便好道：懷州牛吃禾，益州馬腹脹。

古拙禪師示衆

諸大德，何不起大精進，對三寶前，深發重願，若生死不明，祖關不透，誓不下山，向長連床上，七尺單前，高掛鉢囊，壁立千仞，盡此一生，做教徹去，若辨此心，決不相賺，如其發心不真，志不猛勵，這邊經冬，那邊過夏，今日進前，明日退後，久久摸索不著，便道：般若無靈驗，卻向外邊記一肚抄一部，如臭糟瓶，相似，聞者未免惡心嘔吐，直做到彌勒下生，有何干涉，苦哉。

太虛禪師示衆

如來了悟，須向蒲團上冷坐十年，二十年，三十年，看箇父母未生前面目。

楚石琦禪師示衆

兄弟，開口便道我是禪和，及問他如何是禪，便東觀西觀，口如扁擔，相似，苦哉，屈哉，喫著佛祖飯，不去理會本分事，爭持文言俗句，高聲大語，略無忌憚，全不識羞，有般底不去蒲團上，究明父母未生以前本來面目，冷地裏學客春，指望求福懺除業障，與道太遠在。○凝心斂念，攝事歸空，念想纔生，即便遏捺，如此見解，即是落空亡的外道，魂不返的死人，又有妄認能瞋能喜，能見能聞，認得明白了，便是一生參學事畢，我且問懶，無常到時，燒作一堆灰，這能瞋能喜，能見能聞的，什麼處去也，恁麼參的是藥汞銀禪，此銀非真，一煨便流，因問懶尋常參箇什麼，答道：有教參萬法歸一，一歸何處，又教我如此會，今日方知不是，就和尙請箇話頭，我道：古人

公案有什麼不是，汝眼本正，因師故邪，累請不已，向道去參狗子無佛性話，忽然打破漆桶，却來山僧手裏喫棒。

評曰：天如而下，皆元末及國初尊宿，若傑峯、古拙、楚石，則身經二代者也。楚石爲妙喜五世孫，而其見地如日光月明，機辯如雷烈風迅，直截根原，脫落枝葉，真無愧妙喜老人矣。天如以至今日，無匹休者，獨其語皆提持向上極則事，教初學人做工夫處絕少，僅得一二錄如右。

高麗普濟禪師答李相國書

既曾於無字話提撕，不必改參也。況舉起別話頭時，曾參無字，必於無字有小熟因地，切莫移動，切莫改參，但於二六時中，四威儀內，舉起話頭，莫待幾時悟不悟，亦莫管有滋味無滋味，亦莫管得力不得力，拶到心思不及，意慮不行，卽是諸佛諸祖放身命處。

評曰：此語錄萬曆丁酉福建許元真東征得之朝鮮者，中國未有也，因錄其要而識之。

楚山琦禪師解制

諸大德九日中還曾證悟也無，如其未悟，則此一冬又是虛喪了也。若是本色道流，以十方法界爲箇圓覺期，莫論長期短期，百日千日，結制解制，但以舉起話頭爲始，若一年不悟，參一年，十年不悟，參十年，二十年不悟，參二十年，盡平生不悟，決定不移此志，直須要見箇真實究竟處，方是放參之日也。○如未能言前契旨，但將一句阿彌陀佛置之懷抱，默默體究，常時鞭起疑情，這念佛的是誰，念念相續，心心無間，如人行路，到水窮山盡處，自然有箇轉身的道理，因地一聲契入心體。

評曰：舉起話頭爲進期，真實究竟爲出期，當牢記取。

天真毒峰善禪師示衆

果欲了脫生死，先須發大信心，立弘誓願，若打破所參公案，洞見父母未生前面目，坐斷微細現行生死，誓不放捨本參話頭，遠離真善知識，貪途名利，若故違此願，當墮惡道，發此大願，防護其心，方堪領受公案，或看無字，要緊在因甚，狗子無佛性上著力，或看萬法歸一，要緊在一歸何處，或參究念佛，要緊在念佛的是誰，回光返照，深入疑情，若話頭不得力，還提前文，以至末句，使首尾一貫，方有頭緒，可致疑也。疑情不斷，切切用心，不覺舉步翻身，打箇懸空筋斗，却再來吃棒。

空谷隆禪師示衆

不可呆蠢蠢地念箇話頭，亦不可推詳計較，但時中憤然要明此事，忽爾懸崖撒手，打箇驢身，方見孤明歷歷，到此不可耽著，還有腦後一槌，極是難透，偏且恁麼參去。○不參自悟，上古或有之，自餘未有，不從力參而得悟者。○優曇和尚，令提念佛的是誰，汝今不必用此等法，只平常念去，但念不忘，忽然觸境遇緣，打著轉身一句，始知寂光淨土，不離此處，阿彌陀佛，不越自心。

評曰：但時中憤然要明此事，此句甚妙，該攝看話頭之法曲盡。

天奇和尚示衆

汝等從今發決定心，晝三夜三，舉定本參，看他箇甚麼道理，務要討箇分曉，日久歲深，不煉。

昏沈昏沈自退，不除散亂，散亂自絕，純一無雜，心念不生，忽然會得，如夢而醒，覆看從前，俱是虛幻當體，本來現成，萬象森羅，全機獨露，於這大明國裏，也不枉爲人，向此法門，也不枉爲僧，却來隨緣度日，豈不暢哉，豈不快哉。○終日念佛，不知全是佛念，如不知，須看箇念佛的是誰，眼就看得，心就舉定，務要討箇下落。

評曰：毒峯天奇，皆教參究念佛，空谷何故謂不必用此等法，蓋是隨機不同，任便無礙。

古音琴禪師示衆

坐中所見善惡，皆由坐時不起觀察，不正思惟，但只瞑目靜坐，心不精采，意順境流，半夢半醒，或貪著靜境爲樂，致見種種境界，夫正因做工夫者，當睡便睡一覺，一醒便起，抖擻精神，挪抄眼目，咬住牙根，捏緊拳頭，直看話頭，落在何處，切莫隨昏隨沈，絲毫外境，不可采着。○行住坐臥之中，一句彌陀莫斷，須信因果深，直教不念自念，若能念念不空，管取念成一片，當念認得念人，彌陀與我同現。

異巖登禪師釋疑集

問：學人參求知識，或令提箇話頭，或令疑箇話頭，同耶別耶，答：纔舉話頭，當下便疑，豈有二理，一念提起，疑情即現，覆去翻來，精研推究，功深力極，自得了悟。

評曰：釋疑集中，此一段文，最爲精當，今人頗有滯此二端而不決者，蓋未曾實做工夫故也。

月心和尙示衆

憤起新鮮志氣，舉箇話頭，要於結末字上，疑情永長，沈沈痛切，或杜口默參，或出聲追審，如失。

重物，務要親逢親得，日用中一切時，一切處，更無一念。

禪關策進卷之二終

禪關策進卷之三

諸祖苦功節略第二

獨坐靜室

道安大師獨坐靜室，十有二年，殫精構思，乃得神悟。評曰：此老竭精思，乃得神悟，不是一味靜坐便了。

懸崖坐樹

靜琳禪師，棄講習，禪昏睡惑心，有懸崖下望千仞，旁出一樹，以草藉之，趺坐其上，一心繫念，動經宵日，怖死既重，專精不二，後遂超悟。

草食木棲

通達禪師，入太白山，不齋糧粒，餓則食草，息則依樹，端坐思玄，五年不息，因以木打塊，塊破，廓然大悟。

衣不解帶

評曰：饒汝草食樹棲，若不思玄，漫爾多載，異於深山之野人者幾希。金光照禪師，十三出家，十九入洪陽山，依迦葉和尚，服勤三載，衣不解帶，寢不沾席，又在姑射山，亦如是豁然啓悟。

引錐自刺

慈明、谷泉、瑯琊三人，結伴參汾陽，時河東苦寒，衆人憚之，慈明志在於道，曉夕不忘，夜坐欲睡，引錐自刺，後嗣汾陽道風大振，號西河師子。

暗室不忽

宏智禪師，初侍丹霞，因與僧徵詰公案，不覺大咲，淳責曰：汝咲這一聲，失了多少好事，不見道：暫時不在，如同死人，智再拜服膺，後雖在闍室，未曾敢忽。

晚必涕泣

評曰：論道而咲，古人尙呵，今世誦談，諸捧腹無厭，丹霞見之，又當何如。伊庵權禪師，用功甚銳，至晚必流涕，曰：今日又只恁麼空過，未知來日工夫如何，師在衆，不與人交一言。

三年力行

晦堂心禪師，自言初入道，自恃甚易，逮見黃龍先師，退思日用，與理矛盾極多，遂力行之，三年，祁寒溽暑，確志不移，方得事事如理，而今效唾掉臂，也是祖師西來意。

圓枕警睡

詰侍者，睡以圓木爲枕，小睡則枕轉，覺而復起，率以爲常，或謂：用心太過，答云：我於般若，緣分素薄，若不如是，恐爲妄習所牽。

被雨不覺

分庵主爲道猛烈，無食息暇，一日倚欄看狗子話，雨來不覺，衣濕方知。

誓不展被

佛燈珣禪師，依佛鑑，隨衆咨請，逸無所入，歎曰：此生若不徹證，誓不展被。於是四十九日，只靠露柱立地，如喪考妣，乃得大悟。

擲書不顧

鐵面昂禪師，行脚時，離鄉未久，聞受業一夕遺火，悉爲煨燼，得書擲之地曰：徒亂人意耳。

堅誓省發

靈源清禪師，初參黃龍心，隨衆問答，茫然不知端倪，夜誓佛前曰：當盡形壽，以法爲積，願早開解，後閱玄沙語，倦而倚壁，起經行，步促遺履，俯就之，忽大悟。

無時異緣

圓悟勤禪師，再參東山演，爲侍者，窮參力究，自云：山僧在衆無一時異緣，十年方得打徹。評曰：十年之間，無一時異緣，試問：今日間，異緣多少，何時得打徹去也。

造次不忘

牧庵忠禪師，初習台教，後志禪宗，謁龍門眼，造次之頃，不忘提撕，適縱步水磨，見額云：法輪常轉，忽大悟。

忘抵河津

慶壽享禪師，參鄭州普照寶公，朝夕精勤，一日以事往睢陽，過趙渡，疑情不散，忘其抵津，同行

覺之曰：此河津也，豁然悲喜交集，以白寶公，公曰：此僵臥漢，未在，因教看日面佛語，一日雲堂靜坐，聞板聲，大悟。

寢食兩忘

松源嶽禪師，初以居士參應庵華，不契，愈自奮勵，見密庵傑，隨問隨答，密歎曰：黃楊木禪耳，奮勵彌切，至忘寢食，會密入室，問僧：不是心，不是佛，不是物，師從傍大悟。

口體俱忘

高峰妙禪師，在衆脇不沾席，口體俱忘，或時如廁，中單而出，或時發函，不扁而去，後徑山歸堂大悟。

諸緣盡廢

傑峯愚禪師，初參古崑石門，佩受法語，晝夜兀坐，不契，後參止巖，舉不是心，不是佛，不是物，愈疑，乃諸緣盡廢，寢食俱不覺知，如氣絕者，一夕坐至夜分，聞隣僧詠證道歌云：不除妄想，不求真，豁然如釋重負，有夜半忽然忘月指，虛空迸出日輪紅之句。

杜門力參

移刺楚材丞相，參萬松老人，屏斥家務，杜絕人跡，雖祁寒溽暑，無日不參，焚膏繼晷，廢寢忘食，者幾三年，乃獲印證。

評曰：如是用心，如是證道，是之謂在家菩薩也，喫得肉已飽，來尋僧說禪，獨何爲哉，以頭觸柱。

中峯本禪師，侍高峯死關，晝夜精勤，困則以頭觸柱，一日誦金剛經，至荷擔如來處，恍然開解，自謂所證未極，彌益勤苦，咨決無息，及觀流水，乃大悟。評曰：自謂所證未極，故終至極處，今之以途路為到家者衆矣，嗟夫。

關中刻苦

毒峯善禪師，在清溪進關，不設臥榻，惟置一凳，以悟為則，一夕昏睡，不覺夜半，乃去凳，晝夜行立，又倚壁睡去，誓不傍壁，遼空而行，身力疲勞，睡魔愈重，號泣佛前，百計逼拶，遂得工夫日進，聞鐘聲，忽不自由，偈云：沈沈寂寂絕施為，觸著無端吼似雷，動地一聲消息盡，燭體粉碎夢初回。

脇不至席

壁峯金禪師，參晉雲海，示以萬法公案，疑之三年，偶摘蔬次，忽凝然久之，海問：子定耶？對曰：定動不關，海問：定動不關，是甚麼人？金以筐示之，海不肯，金撲筐於地，亦不肯，爾後工夫益切，脇不至席，一坐七日，一日聞伐木聲，大悟。

獨守鈍工

西蜀無際禪師，初做工夫，四指大書帖亦不看，只是拍盲做鈍工夫，乃得大徹大悟。評曰：此意極是，但不明教理者，未宜效颯。

禪關策進卷之三終

禪關策進卷之四

後集 一門

諸經引證節略

大般若經

空中聲告常啼菩薩言：汝東行求般若，莫辭疲倦，莫念睡眠，莫思飲食，莫想晝夜，莫怖寒熱，於內外法，心莫散亂，行時不得左右顧視，勿觀前後上下四維等。

華嚴經

勤首菩薩偈云：如鑽燧取火，未出而數息，火勢隨止滅，懈怠者亦然，釋曰：當以智慧鑽注一境，以方便繩善巧回轉，心智無住，四儀無間，則聖道可生，譬爾起心，暫時忘照，皆名息也。

大集月藏經

若能精勤，繫念不散，則休息煩惱，不久得成，無上菩提。

十六觀經

佛告韋提希：應當專心繫念一處。

出曜經

智者以慧鍊心，尋究諸垢，猶如鑛鐵數入百鍊，則成精金，猶如大海日夜沸動，則成大寶，人亦如是，晝夜役心不止，便獲果證。

大灌頂經

禪思比丘，無他想念，惟守一法，然後見心。

遺教經

夫心者，制之一處，無事不辨。

評曰：守一法，制一處，幸有此等語言在。

楞嚴經

又以此心內外精研。○又以此心研究精極。

彌陀經

執持名號，一心不亂。

評曰：只此一心不亂四字，參禪之事畢矣，人多於此忽之。

楞伽經

若欲了知能取所取，分別境界，皆是心之所現者，當離憤鬧昏滯睡眠，初中後夜，勤加修習。

金剛般若經

薩陀波崙菩薩，七歲經行住立，不坐不臥。

寶積經

佛告舍利弗，彼二菩薩行精進時，於千歲中，未曾一彈指頃，被睡眠之所逼惱，於千歲中，未曾起念稱量飲食鹹淡美惡，於千歲中，每乞食時，未曾觀授食人為男為女，於千歲中，居止樹下，未曾仰面觀於樹相，於千歲中，未曾緣念親里眷屬，於千歲中，未曾起念我欲剃頭，於千歲中，未曾起念從熱取涼，從寒取溫，於千歲中，未曾論說世間無益之語。

大集經

法悟比丘，二萬年中，常修念佛，無有睡眠，不生貪嗔等，不念親屬衣食資身之具。

念佛三昧經

舍利弗，二十年中，常勤修習毘婆舍那，行住坐臥，正念觀察，曾無動亂。

自在王菩薩經

金剛齊比丘，修習正法，諸魔隱身伺之，千歲伺之，不見一念心散，可得惱亂。

如來智印經

輸王慧起，捨國出家，三千歲繫念，亦不倚臥。

中阿含經

尊者阿那律陀，尊者難提，尊者金毘羅，共住林中，後先乞食，各歸坐禪，至於晡時，先從坐起者，或汲瓶水，能勝獨舉，如不能勝，則便以手招一比丘，兩人共舉，各不相語，五日一集，或兩說法。

禪關策進 卷之四

或聖嘿然。

評曰：此萬世結伴修行之良法也。

雜譬喻經

波羅奈國一人出家，自誓不得應真，終不臥息。晝夜經行，三年得道。又羅閱祇國一沙門，布草爲褥，坐其上，自誓云：不得道終不起，但欲睡眠，以錐刺髀，一年之中，得應真道。

雜阿含經

如是比丘，精勤方便，肌膚瘦損，筋連骨立，不捨善法，乃至未得所應得者，不捨精進，常攝其心，不放逸住。

評曰：所應得，須知應得者何事。據此經，則應得盡諸漏，證三明六通，成聲聞果。若今所期，則應得圓悟心宗，證一切種智，成無上佛果。

阿含經

乃至成就三明，滅除暗冥，得大智明，皆由精勤修習，樂靜獨居，專念不休之所致也。

評曰：專念不休久之，則一心不亂。

法集要頌經

若人百歲中，懈怠劣精進，不如一日中，勇猛行精進。

評曰：知此義，則張善和輩，臨終十念往生，可了然無疑矣。

無量壽經

至心精進，求道不止，會當尅果，何願不遂。

一向出生菩薩經

阿彌陀佛昔爲太子，聞此微妙法門，奉持精進，七千歲中，脇不至席，意不傾動。

寶積正法經

樂求大乘，其心勇猛，雖捨身命，無所顧惜，修菩薩行，勤加精進，無少懈怠。

六度集經

精進度無極者，精存道奧，進之無怠，臥坐住步，喘息不替。○心心相續，不自放逸。

修行道地經

佛言：自見宿命，從無量劫，往返生死，其骨過須彌山，其髓塗地，可遍大千世界，其血多於古今天下普雨，但欲免斯生死之患，晝夜精進，求於無爲。

評曰：曰求道，曰聞此微妙法門，曰樂求大乘，曰精存道奧，曰求於無爲，如是精進，名正精進，不然縱勞形苦志，累歲經劫，或淪外道，或墮偏乘，終無益也。

菩薩本行經

直至成佛，皆由精進。

彌勒所問經

佛語阿難：彌勒發意，先我之前四十二劫，我於其後，乃發道意，以大精進，超越九劫，得於無上正真之道。

評曰：釋迦以後進而頓踰四十二劫之先輩，勤惰爲之也。經言：貪著於名利，多遊族姓家，彌勒之所以先學而後成者，坐此則釋迦之棄名利入山林，不親近國王大臣可知矣。識之哉。

文殊般若經

一行三昧者，應處空閒，捨諸亂意，繫心實理，想念一佛，念念相續而不懈怠，於一念中，卽能見十方諸佛，獲大辯才也。

般舟三昧經

九十日中，不坐不臥，假使筋斷骨枯，三昧不成，終不休息。評曰：以上二條，俱指念佛而兼諸法門，修淨業者不可不知。

四十二章經

夫爲道者，譬如一人與萬人戰，挂鎧出門，意或怯弱，或半路而退，或格鬪而死，或得勝而還，沙門學道，應當堅持其心，精進勇銳，不畏前境，破滅衆魔，而得道果。

評曰：半路退者，自畫而不進者也；格鬪死者，稍進而無功者也；得勝還者，破惑而成道者也；得勝之由，全在堅持其心，精進勇銳，學人但當一志直前，毋慮退，毋畏死，前不云乎？吾保此人，必得道矣。法華云：吾今爲汝保任此事，終不虛也。佛既爾保，何慮何畏。

觀藥王藥上二菩薩經

常念大乘，心不迷失，勤修精進，如救頭燃。

評曰：當勤精進，如救頭燃，今叢林早暮持誦，然誦其文，不思其義，明其義，不履其事，亦何益也。

寶雲經

以心繫心，以心住心，心專一故，次第無間，得定心故，心常寂靜。

正法念處經

精勤修行，則得見諦，是故應當曠野寂靜，一心正念，離於一切多語言說，一切親舊知識來去相見。

阿毘曇集異門足論

假使我身，血肉枯竭，唯皮筋骨連柱而存，若本所求勝法未獲，終不止息，爲精進故，應深受寒熱饑渴，蛇蝎蚊蟲，風雨等觸，又應忍受他人所發，能生身中猛利辛楚，奪命苦受，毀辱語言。評曰：本所求勝法未獲，終不止息，卽宗門所謂本參話頭不破，誓不休歇之意也。

瑜伽師地論

六度初三，是戒學攝，靜慮是心學攝，般若是慧學攝，唯精進遍於一切。

大乘莊嚴經論

至心學道，發大勇猛，決趨菩提。

阿毘達磨論

菩薩於底沙佛時，合於十指掌，翹於一足，以一伽陀，七日七夜，歎佛功德，便超九劫。評曰：觀此，則法集所稱，一日精進，勝百年懈怠，信哉言乎。

西域記

脇尊者八十出家，少年謂曰：夫出家之業，一則習禪，二則誦經，而今衰老，何所進取？尊者聞而誓曰：我若不通三藏，理不斷三界，欲得六神通，具八解脫，終不以脇至席，乃晝則研習教理，夜則靜慮凝神，三年悉證，所誓時人敬仰，號脇尊者。

南海寄歸傳 善遇法師，念佛四儀無間，寸陰非空，計小荳粒，可盈兩載。

法苑珠林

唐棲霞寺沙門智聰，居舍利塔西，經行坐禪，誓不坐臥，衆徒八十，咸不出院。

觀心論疏

夫欲建小事，心不決至，尙不能成，況欲排五住之重關，度生死之大海，而不勤勞，妙道何由可契。

永嘉集

勤求至道，不顧形命。○晝夜行般若，生生勤精進，常如救頭然。

瀉山警策

研窮法理，以悟爲則。

評曰：則，準也，以悟爲準的也，卽宗門謂參禪到甚麼處，是歇工處，今言大悟乃已，不悟不已也。淨土懺願儀

若坐若行，皆勿散亂，不得彈指頃念世五慾，及接對外人，語論戲笑，亦不得託事延緩，放逸睡眠，當於瞬息俯仰，繫念不斷。

法界次第

倍策精進，勤求不息，是名精進根。

心賦註

堅求至道，曉夕亡疲，不向外求，虛襟澄慮，密室靜坐，端拱寧神。

評曰：淨業弟子，莫見不向外求，密室靜坐之說，便謂不必念佛，須知念字從心，佛卽自己，以自心念自己，焉得爲外求也，況念之不已，則成三昧，靜密就加焉。

禪關策進卷之四終

重刻禪關策進後序

古人曰：明窓下古教照心，僧堂前坐禪辨道，猶如車兩輪，始可與祖意相應也。大凡無照心之辨道，必止小見；彼二乘外道并惡知識類是也。無辨道之照心，悉落學解，今教律神儒及祖師禪，蓋不出之也。是故如真正道人，以正坐禪研究根塵，以真古教精鍊定慧，況至鞭策怠慢，發中止者，佛祖先鑑可仰以依行矣。吾闡提老翁，自從幼聞泥犁苦境，頻求解脫已來，祈神誓佛，水火不怖，責身苦心，寢食稍廢，一朝見法華經，因緣譬喻之說，錯爲不足取，失力三四年也。十九歲夏在禪叢衆寮，因見巖頭和尚末後爲賊害，大叫一聲，聞數里外，又大失志，以爲現在之害尚不能轉，況於泥犁耶？古人秀逸者已如是，則我輩何得免脫？嗟呼佛法虛誕，參禪無實，僧也俗也，我進無所期，退有所羞焉。於是改志放意，惡見日加，次年至濃之瑞雲，從事馬翁，與溫馬山輩結伴，互論詩文，一日閑坐之次，翻然思曰：身僧而嗜俗事，志俗而預僧倫，大丈夫怎麼打過，亦有不保處。時常晒書之節，內外經籍堆在堂上，翁竊往禮拜懇禱曰：儒佛老莊諸家之道，我以何爲師？願護法天龍示我于正路，閉目良久，任手把著得一小冊，名禪關策進，頂受披之，卽撞著引錐自刺章，且其考記曰：昔慈明在汾陽時，與大愚、瑯琊等六、七人結伴參究，河東苦寒，衆人憚之，明獨通宵坐不睡，自責曰：古人刻苦光明，必盛大也。我又何人，生無益于時，死不知于人，於理有何益？卽引錐自刺其股，翁至此志氣憤激，如吞醍醐，遂乞求其書於馬翁。

常爲照心辨道之友，行住相隨，自是蹈開巖頭醜面目，根塵剝落，觸著道鏡，惡毒手見知喪盡。年過不惑，見徹鷲嶺之藏秘，齡近耳順，闡揚龍峰之家私，其道走殺天下衲僧，其德驚動王侯士庶者，皆出於他囊中所貯一箇之策進者歟。是故翁常讚慈明語，誡學者曰：老僧少時，日三復此語，而不及也。今老焉止哉。又曰：雲棲一生之文字，但此書有補吾宗，汝等他日功有餘力，再刊行之以報祝融之恨。雖然，此書間以念佛參究自己，是則是甚，奪禪僧穎氣，落往生門者不少。若依老僧意，一齊削去可也。何故？獅子不食鴟殘，猛虎不食滄伏肉，往生一機，還他淨家，衲僧門下實智尚不要，何況假名耶？驅耕夫之牛，奪飢人之食，始可以爲真參詳而已。客歲辛巳冬，參學虎上座，與同友二、三子，戮力欲補翁志，便有林氏、渡氏等之檀信，遂捨淨財，玉成其議，於是請予于加數語，以弁來由，仍記先所親聞事實許多，遠傳之不朽云。

寶曆十二年龍集壬午孟正日

住豆之龍澤東嶺頭陀圓慈恭書

大正八年八月三十一日印刷
大正八年九月五日發行

有所權著作
((品 賣 非))

編輯者兼

右代表者

印刷者

印刷所

【國譯禪宗叢書】 第二卷

東京市神田區錦町一丁目十六番地
國譯禪宗叢書刊行會

宮 下 軍 平

東京市神田區錦町三丁目一番地
中 島 藤 太 郎

東京市神田區錦町三丁目一番地
神 田 印 刷 所

發行所

東京市神田區錦町一丁目十六番地(二松堂書店內)

國譯禪宗叢書刊行會

電話神田二四七八番
振替東京四六〇一六番

終